九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 星野村の棚田 : 第4章『耕地の歴史と地名・地誌・民俗誌』

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

https://hdl.handle.net/2324/17968

出版情報：星野村の棚田 : 星野村民俗文化財棚田調査報告書, pp.144-205, 2004-03. 星野村教育委員会
バージョン：
権利関係：

とらんか、冷や水も水口をこまめに動かせば防げる。いまは川からビニール管で引くけど、水がちょこっと減ればパイプがはいらん。

米は自給できる。麦は昔は全部作った。地力差は一枚の田の中でもある。盤が高いとこ、低いとこ、ある。水平の中でも水のかかりにくいところができる。深くためんといかん。田圃のなかに仕切を作ったりもする。

等級はずーっとあるですよ。村の近くが一番いい。八俵ぐらい。一〇俵とれることもある。

―今年はどうですか？日照りが続いたけど。

いくかもわからんね。上は六俵ぐらい。朝早く日が当たって、夕方早く日が落ちる田がいい。

田植えが大変。稲取りをして掛け干しにするのは大変とはおもわん。田植えにするまで、畦塗り。狭いし、枚数が多い。モグラは朝早くいって足で踏んで殺す。

水を入れる。その日は土はどろどろで鍬にのらん。今日あげたらあけの日にしかのらん。あけの日に一鍬ずつあげる。三〇枚。一〇日ほどはかからんけど、一週間はかかる。腰は曲がったまんま。若いもんが、せんというはずですよ。

耕耘機の上げ下ろし、狭いからロープで引っ張ってする。

―牛と馬は？

牛になしたり、馬になしたり。うちへんの田んなか、かかりが悪かけん。田ぁが、せまかもん。けそくそする（落ち着かない）馬ならあぶない。おてて（落ちて）死んだことがある。骨折して死ぬ。牛は落ちない。馬の方が値段も高い。牛の方がよかです。坂道は牛も馬も平気。雄雌は好きずき。ふとうなるとコッテ（雄牛）は扱いにくい。キンを抜きおったです（去勢した）。六年生になったら牛も馬も使った。

薪山は雑木山、炭を焼いた。たきもんは杉の倒れたとき、持ってくるだけ。共有林はあったけど、個人に分けてしまった。まだ最近のこと。松山も竹山も少しあった。

―山を焼くことは？

（杉を伐採したあとの）はれ一焼きはした。うちの杉は今年で16年、それを植えるときまでやった。消防の許可をとって。山持ちは毎年焼く。いまは少しづつ伐る。はれを焼くごと（広くは）伐らせん。何丁歩ってある。芋、小豆を植えさせてくれ。貸してくれ。（そういう人と）共同で、七、八人で焼く。杉を切ったあとだから防火帯は作る必要はない。中に枯れ枝を入れておく。（安全祈願の）酒を山の神様に撒く。ソバはすぼしている（煙が出ている）うちに撒く。種をまき終わったらさび祝い。ごちそうを作って山で食べる。

一年目はソバ、つぎ小豆、里芋で三年、野稲も作った。野稲の頃は（植林した）杉が一メーターぐらいの高さになっていた。お茶は自然に生えてくる。大きくなるまで待てん。芋を植えるときにとってしまう。野稲は陸稲、餅米。

今はむかしの三分の一も仕事はせん。その分、お茶の手入れ、剪定。（枝が）別れてまたがっているのをもぐ。

川はあぶらめとかハヤとか。おかずにするけど、いまは藪で竿が振られん。

淵の名前は岩淵、うちの田んぼの下。子供の時泳いでいたけど、二八水で埋まった。もう一個上の淵、エノハ淵。子供の時はホコで突いたけど、エノハはおらんやった。

飢饉の話はわたしの曾じいちゃん、わたしが一歳の時に死んだ人からじいちゃんが聞いた。笹実（竹の実）の生って、それをなしてから（炒って）食べた。竹は枯れた。ほかに何にも食べ物はなかった。

むかしは歩いて三時間で吉井まで。星野に店はなかった。買い物も炭を売りに行くのも吉井。じいちゃん、馬には一駄つんで自分で二俵からって（しょって）。いまは本当にラクチン、ラクチン。

歩いたから近いのはこっち（吉井）。前は福島（八女郡）に行くことはなかった。

山を越えて夜這いをかけたことは、昔じいさんから聞いたことがある。お茶摘みとかで娘が泊まり込みでくる。それが縁で、結婚することはあった。田植えは四、五軒が一緒でする。こっちはユイとかイイとはいわない。テマガエっていった。早乙女を頼むことはない。こっちが終わってから（浮羽の方へ田植えを助けに）、一、二回は行った。

（広内の田に）狭い道が真ん中にある。上の方（の田）はタカシさん方、下の方（の田）はヨシロウさん方（のおじいさん）がつくらっしゃった。下は桑畑だったのをヨシロウさんのじいさんが開いた。そこの上、タカシちゃんのじいちゃんが桑畑を開いた。タカシさんのおかあさん、いま生きてりゃ一〇〇歳くらい、そのひとが子供の時に開いた。亡くなって一〇年か二〇年。全部、手（作業）、石が出たし、土が出たしして作った。町倒しをしたことはない。

わたしの田んなか、ふとか家（山口さん）のおじいさんが開いた。もう７０年になる。その前は桑畑だった。昭和の初期、去年なくなられた山口ともじさん、その人が覚えているだけ。ここのおじいさん、母さんのお父さん、自分で石をついた。

農機具の小屋、上と下にある。脱穀機三台、一番上、真ん中、一番下。移動できん。年寄りのあれが一番苦になる。中古のいらんというのを買ってから、去年まで田圃にあった。ここは日本一ちゅうですよ。棚田すっとに（美観上）見苦しい。（そういわれて）それでどけた。

田で作業をしていても、よその人に見られる。村の人に見られるのもいや。いま何しよるのーって。

岩のあったとですよ、岩の上に石を築（つ）いてある。三〇枚あれば、一年に一箇所は崩（く）える。

いのししはむかしは、おらんかったけど、いまは出てくる。箱わなをかけるといっぺんに五、六匹子連れが入る。電柵をする前にいのししの入って、稲も倒れるから何にもならんですよ。水を落とす前に入る。何年か前、苗代に入とった（こともある）。

去年、棚田保存会ができて、新聞で募集。田植えと稲刈り、うちもお握り作ったりした。持ち主が持ちきれず、村に寄付した田がある。役場はしきらん。町の人で作りにきたいという人もいる。（その田をどう維持するか）村会議員（の考え）で、労務班（町内の自治組織）、その方たちを何日かこらせるようにしようかな、日役です。そこは今年は八月の終わりに蕎麦をまくことにしている。それでも田の畦塗りを手伝いにくるもんはおらん。

先祖がどうしてあんな田圃作ったか、悔やんでも悔やみきれん。

―ええっ、そうですか。

ああ。

（服部英雄）

## 4.3.2 広内・その２

山口毅利さん（昭和６年生）

聞取者：服部　岩成俊策　栗秋恵二次長

ウーデラ（大平）でお茶作り。（標高差１５０メートルもある坂を）４０キロもある硫安（肥料）かろうて登った。本家の嫁さん、昼お乳を飲ませに降りて、またかろうて登ってくる。ウーデラの下に水がわくところ、「清水の迫」ってあった。（３時）お茶のとき、水をくみに降りた。いま田のあるところより、まーちっと上。高岩ってろん、鎌堀ってろん、あろう。高岩は城跡。合瀬耳納からの本道は峠の下で二つに分かれる。一つはソネずーっと下ってきて、高岩・ウーデラから百段へおりて、元家よりまだ西方、いまも橋がかかっちょる。広内展望所から見て谷の右、斜めに下っている道につながっている。広内と上原の間、ダマワリというとこがあった。曲がらんな、

まっすぐ越えち行く道もありよった。近道で、立て道といった。馬荷の人はダマワリをまわる。

中谷からおりてきた道がいっぽんあがっちょった。あれは本通りじゃ。そこに水の出るとこもあった。いま擁壁に水が出る、もとはあそこから出てた。広内から轟（ドドロ）に行く本道。馬埋け場どんがあった。あれを行くならドドロ通って本星野から笠原（かさわら）へ抜ける高峯越え。町境、「南・北木屋郡」（＊北木屋村か）と書いた碑が今もある。「北・生葉郡星野村　南・上妻郡矢部村」と書いてあった碑は、それよりもう少し高いとこにあった。あの高い方を掘り割り道が通っていたときのもの。低い方は歩いて越しとった時にみちょった。（高い方が）まぁいっちょう、昔の道。自動車みちの工事でとられた。戻してあるだろうって思ってカメラを持っていったら、なかった。あの碑があった古い方の時代の道がウーデラとつながっとった道。

くいたけ（呉竹）越え、後ろ越えて、ミズガノン峠、一路ヨミ通って十籠の方に早道。あっちに行く人は、馬がなけりゃ越えた。馬の人は轟に回り道。昔の行商人。いのうてさり迷った。広内を売って、上原を売って、みずがのん峠から呉竹まで一山越したつもりが、今売ったとこ、広内だった。より返らしたげなって。

ヌスドンババは浮羽の字名じゃ。むかしは浮羽の方が強かったけん、出たとこ出たとこまっすぐ見通して浮羽ん領分にした。あとで星野は分けてくれ。ヌスットのババ、ニキも後で分けてもろうてきた（＊浮羽町に盗人馬場があるが、星野の小字名にも盗人馬場がある）。ババはウマ場、ってことじゃ。ばばしゃんのババ（盗人のばあさん）じゃない。山賊がウマの練習をしたとこ。人家は今はなか。元はあっただろう。終戦後は引き揚げ者が住んでいた。俗名はナラワラっていう。正式は図面を見るとヌスドンババって書いちゃる。

合瀬耳納もあとで、相談してわけてくれぇ。秣山って、むこう（浮羽）は十二か町村、星野は一村。負担金をうんと出さにゃならんとですたい。あまりに広うはなかろうか、返そう、ということがむかしあった。それを少しずつ取り戻した。新八郎じいさん、わたしのひいじいさんの頃。椋谷へんが腰の強うして広うもてた。

懐中電灯が流行りだした頃、まだ暗いうち、浮羽の草場で草をヌスットしていきよった時分のはなしを聞いたことがある。草泥棒ってつかまって馬に乗せられち、ヤマドから連れてかれたち、親戚のもん立てて、ことわり入れて、もろうてきた。そんな話も聞いた。向こう分を切りよったってことです。

どこでん堆肥つくったですからね。夏中、草切った。一日動きよった。馬に六把、自分も二把いのうて、昼間、帰ってきた。木炭を吉井に出すとき、馬には八俵、上に六俵、その下に片側ずつで二俵。自分が四俵いなう。合瀬耳納まではおっかさん、二俵いのうて送りよった。じいさんにいくらかずつ持ってやって帰れる（＊登りはたいへんだから、手伝いに母親が二俵背負って峠まで行った。合瀬耳納からは下りだから父親一人で、その分も全部もっていった）。銭かっての利息ぐらいにはなったってことでしょう。

うちも貧乏だったが、親は学校に拡声器付けることに関わった。仕換えた（補修した）ときの記録はあるが、（設置した）はじめの時の記録がない。おそらく親方として、わがでで（自分の力で）しとろう。父親が消防の役をしていて自分の声を初めて聞いて、えらく恥ずかしい思いをした。これからの子供には放送設備が必要と考えた。堀川バスで長尾まで運んで、そこにおやじが馬で下ってきていた。試運転の時、「よしむらさん、聞こえますか」って。

自分は九つから茶をもんできた。五十六歳で農林大臣賞いただきました。茶山歌は聞く

とは聞いた。カマセイリをうちにしよった。かたって、もみよったから、ばばさんたちが歌うのは少しは聞いていた。いえ、あたしは。人が歌うなら、つけてなら、ちっとは歌うが、一人では----

♬ハーァ、ヤーレェエ、
縁がないならぁあ　茶山にござれぇ
茶山　茶どころ　縁どころぉ（もましゃれもましゃれ）
ハーァ、ヤーレェエ、
ばばがしょんべんまりゃよー
すずーめ（雀）がぁ笑う　一羽・二羽・三羽・しーわぁ（四羽）だらけぇ（一同大笑い）。

カマセ、あとでは各家になったけど、はじめはうちと元家だけ。一人がカマで煎る人、もむが六人。夕方涼しくなってから。歌もでる。あとでは家族だけになったけど、そんなころはお茶子さんもいる。親父は、うじかわまでお茶摘みさんを迎えに行った。後ろと前に振り分け荷物。あの坂をずっーっと下りてきたですよ。自分も呼びに行ったことがある。よか時だけは摘みきらん。天気の悪いときもある。二週間ぐらいはいたでしょう。本整になってからは男はそっち。カマセは女だけになった。本整は汗がだらだら出る。歌どころじゃなくなった。

―もみすり歌は？

あぁ、あったかもしらんですね。松の木で、トウス（唐臼）でゴンゴン引きよった頃の歌ですね。

わたしも十三の時、死ぬる覚悟でいた。室山で祈願も受けた。八女郡から四十人、田中浜でグライダー訓練を受けた。役場の人に送られて、第二次兵団、ムリョウ海兵団、佐世保に検査に行くので、はじめて汽車に乗った。出征せずにすんだから、みんなよかったですね、っていったけど、そん時は、わたしはえらい残念でした。

### 4.3.3 十籠

高木等さん（大正５年生）
聞取者：服部、段上

上井手、中井手、下井手がある。灌漑面積は上井手は一〇町歩からあった。中井手は合原の上で水をとって十籠まで。面積四町弱、下井手は四町ばかり。下井手のことを古野井手ともいう。下井手は昔からあった。作りやすいところから作っているということ。上井手は龍河内（リュウガチ）線から（水を）とる。まったく新たに作ったときは、途中で岩がある。掘りきる場合もあるし、トンネルを掘る場合もある。当時は道具がない。体力的にも苦労した。途中、ワシガヒラダン（鷲が平谷）、ムラノタン（村松谷？）、オサコ（尾迫）の谷を通るけど、谷には水はほとんどない。それまでこのへんは竹屋根（藪）だった。明治の中期ごろ、（流末の）延長工事をしている。祖父が測量した話をしよりましたがね、水平に引く。竹を割ったのに水を入れて水準器。（当時の技術では水路は完全に水平には掘りきれない）深いとこも浅いところもある。じいちゃんがいいおったとは、アソ（麻生）の山から対岸にちょうちんをつけさせて、両方に順番に人が立つ。山から見て高いとか低いとか、それもちょうちんで順番に合図する。上がり下がりの高低を測量した。そのとき、宮浦（宮蔵か）、中たじ（中渡瀬か）まで、水路を延長した。いご谷（ひご谷？）のちょっと下から引っ張った。その時できた田がシンタ（新田）。トンネルはいまも昔のまま。シンタの水路、トンネルの中でかがんでほる（屈んで作業した）。左右がずれている。わたしが小学校、行きおる時分の話ではないか。じーちゃんは文久生まれ（文久は一八六一～六四）で、九四才で死んだ。

大正一〇年に水害があって、その復旧工事だったらしい。工事費の記録は残っている。用水ホリ、つつみ（？）、同じ予算で（水路）

改良と同時に作っている。

上井手は村の役に立っている。簡易水道(暗渠）の水源にもなっている。

昭和二〇年代にシンタの耕地整理をした。役場の後ろ、「立て道」に沿った両側はその時の田んぼ。石垣を積んだ。名人がいて奥谷小学校の石垣をついた人。くりあきさん。当時チン（鎖・滑車の機械）はない。肩の上で石を転がしたりして積んだ。鍬でやった。石垣積み専門の人をガキツミさんといった。学校の石垣、棚田それだけで生計の立った。右に出る人はいなかったけど、もういない。今は一人、ウエバルの山科ふじおさんと、柱原（はしらばる）の山科光さんが積む。

むかしは棚田とはいわなかった。たんぼとか、段々畑とか。ふるさとキャラバンがきてから棚田というようになった。りっぱな棚田、全国でも珍しい、棚田サミットをしたいって。

旱魃はなかった。今年ぐらいの日照りではどうということはないが、水が来ないことがあった。消防ポンプをかって（借りて）いって、ポンプアップ。

上井手・下井手間は長い(取水口間の距離、離れている)。雑木山で水は豊富。（それでも）簡易水道をとった昭和四七年頃、（堰を）コンクリーにするとき、中井手、下井手が文句を言った。下は漏水をあてにしている（＊石積み井堰だから漏れ水があった。絶対的に水量が潤沢だったわけではないと思われる)。平成五年の旱魃はコンクリだったから(上井手は)よかった。簡易水道は旱魃になったらポンプで揚水するという条件で作った。道路の下に七五ミリの水道管を埋めてある。

川の渕はいろいろ名前はあるよ。ナガブチ、あの椋の木のあるところは何ていった？椋の実を食べたけど。そう柿の木ブチだ。ジャガランブチは穴のほげちょる（152頁参照)。コノ（古野）井手のすぐ上。石を投げ込むとジャガラーンという。本流にはキョウトリブチ。農産加工施設の裏。江戸時代から金鉱があった。スイミズ（酸い水）がプスーっていう。ベスっていうからベスイ水ともいう。炭酸水のこと。砂糖を入れるとおいしい。ベッスイを汲んできて赤ちゃんを木の盥（たらい）に入れると汗疹（あせも）に効く。池ノ山で沸かした。温泉に入れると赤（あこ）うなる。抗口は斜坑で左岸に見える。ベッスイは川の向こう、水平抗に貯まっている。簡単に汲みにいけるさ。

川にはサカウケ。石を三角形に積んで魚を追い込んで取る。ウナギより大きいのはテボでとる。雑魚を取る。テボと網は許可がいる。一年分の会費を払う。サカウケ（の設置）は自由だけど、下からあがってくる魚を捕るのは禁止。上からさがる魚を捕るのはよか。早くいったもの勝ち。ヤマトロガニ、ハヤ、オイカワ、ウナギ、コイ、カニがとれる。エノハはあんまりおらん。漁業組合が稚魚を放流している。

田の等級差、地力の差はあまりない。十籠から上は赤土粘土、米はよくとれた。用水路の下は土坡、草は自由に苅ることができた。あと杉の植えてない原野があった。そういうところが草切り場だった。

## 4.3.4 鹿里　Ｈ１４・２・１１

笛田厚一郎さん（昭和五年生）
樋口　　昇さん（昭和一〇年生）
聞取者：服部英雄・本田佳奈・山田美香

### 聞き取りできた地名

ドウトコ：田であったが今は少しになっており、ほとんどは茶畑。堂があった。祖父によれば金持ちの家がここに三軒あり「甘木千軒ドウトコ三軒」といって、乞食の人が甘木を千軒まわってもらいだすものと、ドウトコの三軒でもらえるものが同じくらいだった。ここからは茶碗などが出てきた。
ボウズダ：田。坊主（和尚様）がいた所？

ユノシリダニ：ドウトコの裏にある谷。谷はタニバタ（樋口さんの家の屋号）の近くにも一つあるがそちらには名前がない。
ウマンコネ：一帯の山。
イワモト：山。
ソノダ：イワモトの下の辺り。
ハギノデラ：鹿里の草きり山。焼くことはなかった。その後松山になったが戦後切ってしまった。昔はこの辺りで小学校の運動会があり、父親から先生とけんかをしたと聞いたことがある。明治３０年頃。
オクサンダイラ：大草（おおくさ）とも。イクサンダイラ。発掘のとき矢じりが出土したので合戦があったのかも。この下には飲むことのできるきれいな水が湧き出ていて「てあらいの水」「おておいの水」といった。
モリ：山の神を祀っていた。今は畑。この近くに以前お墓があり、骨が出たことがある。

〈寺〉

半分は長尾の浄眼寺、もう半分は横山の西光寺（上陽町）。椋谷はエンジュウジのミョウフク寺（吉井町）で、ここの柱には星野村の木を使っている。

〈石垣〉

自分のところの石垣が崩れたときは自分で作り直すので要領は皆知っている。しかし井手口のデンゾウさん、ヤマグチヨシミさんは石垣つぎが特にうまかった。今でもヤマシナフジオさん、ヤマシナヒカルさんはうまい。みんなプロの職人というのではなく、いつもはお百姓さん。

＜金山のあった頃＞

昭和１８年まで金山があり、その頃の星野村の人口は１万人を超えていた。赤線がいくつもあった。戦前は十籠、戦後は寄。

〈屋号〉

タニバタ：樋口さん宅。
ほかにはない。

〈道〉

・ドウトコ　ナカオ　ガランドン
・シンヤ　シンザカ　アガリタテ
・イワモトの近くから古塚へ（古塚道）。旧道。

水路・出水

〈水路〉

一日かけて赤土を盛る。赤土をとる場所は決まっており（個人の山）、天秤棒でかついで運んだ。土のお金は払わなくてよかった。（土用など）土をとってはいけないというタブーの日はなかった。赤土で堰をとめるところもあった。道路の普請にも赤土を使った。
カンカンブチ：坊主が鐘をカンカン鳴らしたからか。パイプを引きポンプをつけて水をあげる。ここからナカオ・シンヤのほうへ水をやる。昔はシンヤへは水をやることはできなかった。

〈出水〉

杉の本の出水、タニバタの出水、モリの出水、

〈青年団〉

ワカシュグミ、４Hクラブなど。１０人くらいで集まり、素人演芸会を見に行って酒を飲んだりした。ヒサオ君、アラタさんのところに泊まった。毎晩ではなく機会のあるとき。昭和の初期（終戦前）までは夜這いなどもあったらしい。

（本田　佳奈）

## 4.3.5 龍川内リュウグチ　H14.2.12

佐々木政剛（せいご）さん（昭和六年生）
聞取者：服部英雄、森松さん、本田佳奈
　　山田美香
イゴタニ（イゴダン）　ガニブチ　ウナギブチ　トウゴウブチ　ナナマガリ…宿の谷へ続く道。　ヒビラ…日のよく当たる田。８反。
　キタビラ…ガニブチから水を取っていた。６反。　チャエンワラ…茶畑。
＊ほか龍川内リュウグチの地名については氷室美治氏より以下を聞く。

トヤンサコ　クワノキザコ　ホンサコ　ロクジゾウサン

・ナナマガリは七つ曲がっとるけんが、そう言ったのかも知れない。昔は山伏の通ることもあった。宿の谷が山伏の宿。泊まって高良山（こうらさん）から阿蘇へ。宿の谷まで３０分はかかろう。龍川内から馬を連れてここを通り、浮羽に行った。山口のしんちゃんとも行ったもん、谷渡りの岩を馬で七曲がりをあがって浮羽のキャーマチまで売りに行った。

・ヒビラ（日向）は日のよく当たる田で８反ぐらい。一軒で作る。山口八太郎さん。テルヒコさんのおとうさんのおとうさん。家は昔からあったと思う。お墓に書かれとる名前は、えらい昔のしらんものばかり。あそこにあるお地蔵さんは古い。文化財になっている。ヨドがありよった。祇園さんのヨドとかのヨド（宿？）。祭りの前の晩にある。山伏が関係していたかもしれない。気味の悪かごと、それで祀ってあるんだろう。広内の方からずーっと山伏の道があって、それできちゃんじゃろう。まだ十籠の方の道はなかったですもんね。

・北ビラに行く水道はガニブチからとりよります。ヒビラはガニブチのずーっと下から取る。以前につけかえた。

・キタビラは３反。やっぱり５俵ぐらいしかとれんけんですね。

・山畑はハレヤキ（焼畑）。ハレー焼きをしてから植林をしていた。自分の山でアワ・ヒエ・ソバ・コンニャクなど。イモ、お茶は出しよった（つくって出荷できた）。茶は藪を切ると自然にでてくる。杉を切ったりすると出てくる。一年のうちに何をどれくらいつくっていたかはわからない。ノイネはもち米じゃった。わたしたちはやったことがない。用水（路）ができる前はノイネをつくったらしい。水道ができてからは稲に変わった。

・十籠ぐらい広けりゃなんだが、ここらではばらまいて掘り返して畝切って、順序よく焼きよった。自然林は炭焼いたあと、ハレー焼き。

・田植えの時は平山・浮羽からも加勢があった。山口さんがいちばんお世話。ここから上、浮羽の葛籠（つづら）まで何町歩とある。山小屋を作って忙しいときはそこへ泊まった。豊福さんも一町ぐらい作った。豊福八太郎さんに継いで、平山下は九蔵さんが作る。いま的別当に降りた。

・リューグチでは石垣をつくときは職人を雇っていたようだ。むかしの商売人、職人さんを雇うて、ついた。どうも素人じゃなかもん。

・ウナギブチの近所に引きあげの人たちが住む家が３軒ほどありヒグチと呼んでいた。田はなかった。炭焼きをして生計がたった（立てていた）。木炭も統制で木炭検査があった。樋口に村自体はなかった。おおむかし製材所があったらしい。水車で丸ノコを回す。丸ノコは半径分の長さしか切れん。大きな材木はオギノコで切る。

・シイやカシの実は子どもがおやつとして生でも（そのまま）、煎っても食べていた。シイは小さい。イッチイ（イチイカシの実）は煎ってから食べた。ドングリ（イッチイ以外のカシやクヌギ）は、食べると血を吐くといった。えぐいってこと。にごう（にがく）て食べられるもんじゃない。どもりになるといっていた。

♪食べると、どぼりになりますよ　どんぐり山のどんぐりは、煮ても焼いても食べられぬ♪

そういう歌があるけど、どもる人の人物はよか。

小学校の頃どんぐりを拾い集めて出荷していた。植林にするのかと思ったけど、あくを抜いて食品にしたと聞いた。

・ここで生まれたけれど、飢饉の話は聞かない。

・N製作所の□さん、あのひとがっさい、子どもの頃“いい肉がとれた、あんたがた、たべんね”と言って肉を持ってきてくれた。そ

れが臭うて食えん。うっすてたけど、そうはいえんかった。後からあれはネコじゃったげな、って。イタズラだったらしい。
・小鳥、ウサギ、タヌキ、アナグマは罠をかけた（仕掛けて捕まえていた）。小鳥はヒヨドリ、カッチョ、あれはつぐみというのが本当。タヌキはだまされて食べた。おいしい。
・ウサギは山にいるものと家で飼っているものでは数え方が違った。山ウサギは１羽、２羽、飼いウサギは１匹。２匹。
・昔は総けやきの屋敷があった。
・炭焼きのために使用する土を取ってはならない日というのはなかった。いつでもとりましたよ。
・田の堰は大水の時流れてしまう。わらとかぼろとか、入れて、赤土を使って作った。赤土をとる場所は十籠の土取り場。かまど、くどやらみんな取った。そこはわたしが持主。
・離村しても、龍川内リュウグチにまだ家はあるけど、（住民登録した）住宅はない。いまでもここはランプ生活。電気はこない。若い頃夜11時くらいまで起きていて本を読んだりしていた。小説とか。目は良かった。よそからきたもんに字はよめん。ランプは目に優しい。電気は目に悪い。
・結婚はお見合いが多い。相手は浮羽の人が多かった。御茶摘みに来て知り合ったことが多かろう。夜這いの風習はきいたこともない。そんなことをすると家が少ないのですぐにわかってしまう。
・ここのばばさん、鹿狩（カガリ・浮羽町）からきた。母は的別当から、葛籠（つづら）からきたのはわたしの嫁。
・龍川内から学校までは片道８ｋｍほどあり、１００歩進むごとに指を一本折りながら歩いていった。４０００歩で学校まで行く。
・ここはまぁまぁ豊かでした。大正十四年、道路のでくるときの記念碑、信太郎さんが千円（を出した）、元庄屋の高木酒店のつぎ、しとらす。開墾願い、開墾願い、農地改革でも田は自作農だったから取られなかった。山持ちは泣いとります。　　（本田　佳奈）

## 4.3.6 迫 地 区　2002年２月12日

梅野実さん（大正八年生）
調査員：森松詔徳（ツグノリ）さん（昭和六年生）
星野村役場同行者：高木
聞取者：服部英雄・本田佳奈・山田美香

### 熊野高室神社のこと

高室神社は見事なもの。山の頂上にある。ちかくには船着き岩（この名前は新しい）、権現山、というのがある。人焼き岩もある。やんぶしは見たことはない。やんぶしの屋敷は神社にあります。護摩焚きの跡もある。人焼き岩はやんぶしを焼いたとか。そこまでの参道にはおがみの松と呼ばれる松が一本立っていた。今はもうない。昔から修験が修行をした場所で、女人禁制だった。だから女性は途中まで参道を登り、そのおがみの松までしか行けなかった。そこで参拝したから「おがみの松」。

テエランジョウ（平城）はクリゲの上。フジョウ（古城）は祇園さんのちょっと向こう。

### 井堰と井手

渕の名前にはジャガランブチ、ツリガネブチ。木浦の方には田畑は無かった。茶畑があったけど、今はもう全部植林されている。木浦の谷や渕に名前はなかった。

（近場では）堰堤のところで草やカヤを切りに行った。（遠い）キウランノウ（木浦の野）と呼んだところには農閑期に刈りにいった。昔はそれこそ毎日行かなきゃならない。使っている牛が食べるから。野に行くのは四〇分から小一時間くらい。だいたい四キロくらい。

井手…清水谷から神社のほうにずーっとひっぱってある井手が一つあった。岩の間から神

社の池に落ちる。名前はついてない。場所は下の大曲のところ。

## 田畑のこと、父親の田んぼ作り

家の前の石垣は親父が築いた。親父は明治三〇年生まれ。日露戦争で片足を失って帰ってきた。人夫を二、三人やとって、自分で築いた。奨励金をもらって作ったから、金はかかってない。まあ、ほんとに。昔の人はえらかもんよ。片足で、本当はちゃんとした義足があったが、あたるから使わなかった。自分でモウソウ竹を切って、綿をぐるりとつけて、それをはめてた。カッポカッポいいながら、来んなったもんなぁ。そこ（石垣近所）の柿の木でん、なんでん、スルスルスルーっと登った。まあ、こっちはここから見てて、あぶない、あぶない、騒いでても平気で登ってた。片足で、竹の義足、八二まで生きとったが、昔のもんはちょっと、すごかよ。ああ。

田んぼは面倒になって、畑にしようとしたが、ダメだった。もともと田んぼを作るために奨励金が出たからって。まあ、じきに全部茶畑にした。

田んぼの名前ではイヌオトシというのがあった。ヤシキは道路ができるときにつぶされた。

迫井手、地主には相談するばってん、全部、赤土で止めてもイイ。旱魃はなかですねぇ。

青物はいろいろ食べとるもんなぁ。カボチャの茎やら、さといもの茎やらアカザ、アオザ。たばこ、のむのにイチゴの葉を替わりにした。たばこないから。カンネ（葛根）は取りよった。白い葛をとったあと、カンネダゴ、ちょっと苦かった。

## 飢　饉

飢饉には笹の実を取って食べた。おじいちゃんから聞いた。竹が枯れるとき、実のなった。米のようにした。米の実とかわらん。

## 電気と灯油

昭和三十四年に迫に電気が届いた。それまではランプ。えずうして、えずうして。役場から灯油、無灯火部落への配給。灯油だって、昔のものだから色が黒ーく、すすける。

## 山のこと

星野村は地力がいい。だから峠のほうでも地力がよい。ハレー焼きをするときは火入れ願いを役場に出した。月日、人夫の数、焼く所なんかを記入した。燃え広がって迷惑あった時は、役場へ罰金があった。

昔はどの家も一頭は牛を飼っていて、多いところは二頭。馬は足元が悪い。牛は強い。個人山の立木を引き出すのに使った。多い時には一日二回、同じ牛で降ろした。キンマ道は昭和五、六年ごろまで使ってた。菜種油をひいて、すべりがよくなるようにした。降ろしたのは杉や松。カンをつけ、一人で牛を引いた。

立木を降ろすのには浮羽のほうからも人を雇った。だから、その為の牛小屋が家の前に作ってあった。

## 牛のこと

牛を扱うのはなかなかこわい。ちょっとの油断もできんかった。子牛でも恐かった。今は楽なことよぉ。トラクターでも、なんでも、たべるもんはいらんし。田畑で使ってて、ちょっとでも家の方に面が向くと、帰りたくなってチョコチョコ、チョコチョコ動く。だからわざと家の方に面が向かないようにした。

立木を引き出すときは、一人で綱は一本。それで曳いた。田んぼで使うとき（鋤起こし）は二本。左右に動かすときに掛け声はかけない。左右の綱を強く曳くのが合図。進めという合図は「ッサ・シッ！」という。

※牛馬の動かし方は、地区によって異なる。左「ッサ・シ！」右「ッセイ！」というところもあれば、迫のように言葉を用いないところもあった。

## 戦争の記憶

軍馬の払い下げを受けて使うときだけは、軍隊風に「進め！」と号令をかけた。「軍馬は人になれて可愛かった。ものいわんばかりじゃったよ。北海道の道産子が多かった。足がしっかりしていて、頑丈。」

戦争のころは自分は久留米の重機の四八（ヨンパチ）にいて、留守だったから。戦地へはいかなかった。教官をしてて。（自分らが育てて）送ったもんは全部死んだ。重機は射撃訓令で、まず、５０メートル走って伏せる。そしたら300メートル先にパッと的があがる。十五発中十三発命中する。それくらい、重機の部隊は優秀だった。でも現地にいったら、もう…。バタバタ死ぬ。終戦で、久留米では新品の機関銃がドッサリ米軍に取られた。負けるはずですわ。同期はほとんど死んで。戦死者は多か、多か、もう。まあ、星野村全体。若いのなんていない。日本中。帰ってきて、自分は村の青年学校の先生やったけど、その頃なんて、自分みたいな若いものが村の中うろうろしてると、気の毒なほどだった。（それぞれの家の若者はほとんど戦争から還ってこなかったから）

横山に米軍機が墜落したことがあった。グアム島から炭鉱地帯を爆撃せよという命令を受けて、あんまり低空を飛んで、大牟田あたりで高射砲でやられたりする。横山に、六人落下傘で降りて来た。そしたら捜索隊がでて、星野村中でも探しまわった。そしたら、五人捕まったんだけど、後になったら一人おらん。家のもんが戦死した人。兵隊はすんなすんな（って止めたけど）「これ（敵）がおかげで死んだ」って。竹槍やらなんやらで。もう、顔から足から血まみれで死んだらしい。死体を田んぼにこっそり埋けてあった。残った四人はお寺、目隠しして手を縛られて、久留米大学に送られて、生体解剖された。終戦後にそのことで軍事裁判があった。

（森松）ここらへんは、久留米の輜重隊が星野小学校にきた。炊事を作る。酒飲んで日本は負けるといった兵隊もいた。大迫さんという軍曹は、おとなしい、子どもを可愛がる人で、自分なんかも遊びに行ったら飯を食わせてくれた。

そのころ、焼夷弾のために、天井裏はみんなはがしてた。花畑の宿屋なんかでもそう。焼夷弾が天井裏にささって、ぶすぶす燃えてても気付かない。あぶない。だからわざとはずしてた。

八月十三日が久留米の大空襲。動員で山に松根油を取りに行ってて、久留米が火の海になるのは見た。真っ赤に焼ける空が見えた。それからモクモク真っ黒な雲。どす黒い雨がどうどう落（おつ）るわなぁ。（戻ってよいという）命令も受けとらんのに、はよ帰るぞ。戻ってきた。

戦後、小学校の体育館には日本刀が縄で縛っていっぱい放りこんであった。双眼鏡なんかも。今から思えば、どうせいらないんだから、こっそりもらえばよかった。双眼鏡なんて、ねえ。あの頃めったにあるもんじゃないし。…私（森松）の親父は三八歳で金山の技士で、機械の整備、四二歳になっておそくに招集されました。戦車の整備士をやってて、訓練を受けて、それから南方、フィリッピンで戦死しました。私は昭和六年生まれで、母親が育ててくれました。

―靖国神社へは、お母さんは行ったりしましたか？

はい。あのころはそれこそ、靖国にいけば会える、っちゅう教育でしたから。教育の力よ。うまいことだまされたが。ほんになあ。えらいことよ（教育の力は影響力の強いことよ）。ばかんごたなあ。むちゃくちゃよ。

（本田　佳奈）

## 4.3.7 吉城

氷室　美治さん(大正一四年生) 2月13日

調査員：森松詔徳(ツグノリ)さん（昭和六年生）

星野村役場同行者：栗秋次長

聞取者：服部英雄　本田佳奈　山田美香

### 牛の話

牛に“じぇれ、じぇれ！”というのは後ろに下がれ、という意味。バクロウがトウネゴ（当年子のこと。生後1年までの仔牛）を益城郡（阿蘇郡）の小国から連れてやって来る。それを買って1年飼って育て、種付して子持たせをする。次の年には再びバクロウが子牛を連れてやって来る。牛は成長すると、なかなか気が荒いし、力が強い。戸張を破って逃げ出した牛がいたこともあった。

### 飛　松（トビマツ）

岩のずっと上のほうにある立派な松の大木。矢部から山越えして吉城に戻るとき、必ずトビマツは道中の目安になる。昔山道を行くときは“あすこが、たかます（高松）、あすこがトウマンちゃんげ（＝家）”、って（頭の中で）言うてですね。歩きながら場所を確認しよったわけ。トビマツはそういう目安のひとつ。

### 龍川内から熊野神社への参道

ヤマの中腹、あたしらが山仕事行くときは必ずその道を帰ってきよりました。はい。

—表の参道はおがみのまつの所から女人禁制ですが、裏もそうでしたか。

そういうのはなかったです。あたしたちの家（氷室家）は神主じゃったけん、こっちから、よう、行きよったろうが。シモの人が七曲をまわってくるとが、昔の参道じゃったけん。ケンちゃんげん（家）を上がった道がナナマガリっていう。途中にオンノテガッタって、手の形をした石。昔、神社で御輿を担いで、登ってて（担ぎ手が）傾いで、おみこっさん(御神輿さん＝神様)が手をついたげな、って（笑）。そんな由来を聞いたことがある。オンノテガッタはオガミノマツのずーっと下、ケンちゃんげん（家）上の方。たけちゃんげん田んなかから、人骨かわからないけど、えらい沢山出てきた。セマッダシ（畝町倒し）したときに。戦時中。サコズリって言ってたところ。

### ハレー焼きのこと

山ノ神に捧げるのは、こんにゃく、くれいも、人参、干し柿、ごぼう、もち。うちでは、ハレー焼きのことをヤマヅクリっち、いいよりました。ハレー焼きは…あれは結局、ハレという状態になるでしょ？なんがハレっちいうかは、どういう状態かは、よういえんけど。だから、ハレー焼き。山作はソバ、アズキ、小麦、大麦、サトイモ、陸稲（ノイネ）。四、五年。アズキはアクが強い。

### スギ皮剥ぎの話

今はもう誰も切らないから花粉症なんかがでる。昔はそんなこと、なかったです。20～25年位で切ってた。今は40年たっても切らないから花粉が出て人が花粉症になる。昔は20年もののスギは2000円。今はァ、もう！ただみたいなもんです。」

—スギ皮は扱いましたか？

「はい。昔はスギの皮がお金になりよったでしょうが？スギの木1本につき、ネギリ（根切）賃というものがあった。木の手入れ代のこと。山に何本か、満たない幼木があった。スギの皮剥ぎ、春の彼岸までにやり終える。それから後は梅雨があって、皮が腐って木から剥がせなくなる。だから彼岸から盆の七夕前まで、皮剥ぎは中断する。“七夕からがよか”と言われた。」

—杉皮の剥がし方には決まった方法がありましたか？

「剥ぐときの長さはすべて3尺にそろえる。棒か何かで３尺に測るものを作っておいて、それで測って、木の胴体に鎌でキリーッと切りまわす。で、ヘラで皮をガバッとはがす。剥がした皮は、木肌のほうを下にして、竹のひもやかずらで縛って４段に積む。今は針金で縛る。これで３枚１坪になる。4段に積まずに、剥いだスギ皮をクルクル巻く人もあった。でも巻いてしまうと皮がすぐ乾いてしまう。巻いて出荷する杉皮は、屋根に葺く前に石で重しをして水に漬さなきゃなんない。」

―どのような方法でスギ皮を屋根に葺くのですか？

「葺くときは三分の一くらいづつ、ずらしていく。フシ（節穴）が隠れるように。雨水がかかるでしょうが。必ず８枚が重なるようにした。一番下のところは特にフシがないように選んでおく。それと、半分に切った皮を充てるようにする。そしたら４枚しかない一番下の皮も８枚になって丈夫になる。こうやって、山小屋を葺くときは工夫した。一番安上がりだから、山小屋じゃなくても、（普段住まいの）家も杉の皮で葺いた家もあった。」

―萱（カヤ）と杉皮では屋根を葺くときにどういう違いがあったんですか？

「カヤを葺くのには技が要るから。春に萱野を焼いて、秋のはじめに竹を刈って、用意しておく。古い萱を混ぜてしまうと屋根が弱くなるから、春に必ず野焼きをする。葉や房を束ねて良くしごく。房が広がってしまうから、全体的に均一な厚さの屋根になるように良く踏んだ。葺くときはやっぱりカヅラで。だから、昔は屋根葺きの加勢に行くときは、縄をひとつぐるり、持っていった。」

## 龍川内について

龍川内には山仕事でいった。造林です。杉苗でん、なんでん、肩から担いで。帰りは牛の草刈って帰って。牛はつれていかなかったですよ。山出しするときくらい。たいがいは、田んなかに入れて使う。

## 龍川内の地名

トヤンサコ、イゴダニ、クワノキザコ、ホンザコ、オギノ岩（オオギノ岩）。

鉄塔道（テットウミチ）はずーっとダムまで続いてる。山に行くときは、これをずっと伝って。昔の道。いつも草刈してある。九電の道（電線の鉄塔の下に作られた道のこと）を行けばほとんど道に迷わない。八女でん、宮崎でん、椎葉村（宮崎県椎葉郡）まで行ける。今はもう、山の中でいい道はこれだけ。むかしは材木出しや、山林労務者が道を通ったけど、今、この道行ってるとは、わたしとイノシシだけですよ(笑)。もう林道が下に行った（開通した）から、だれも通らない。わたしとイノシシだけ。

## 木浦について

明治25（1895）年「星野村是」（基本計画書）では路改良、森林育成、海外移住、海外出稼ぎとともに開墾を奨励している。「字、ヤシタ野、竜ノ脇地方の渓間、吉祥名字野添、木浦地方、大地方ノ間ハ、一朝発奮シテ出ヲ開墾シテ二、三十町の水田ヲ得ベク、其他点々開墾スベキ」の一文がある（『星野村史産業編』126ページより）。明治のころ木浦は田畑に開墾地とすべき山林と目されていたが、聞き取り調査では実際に開墾のあったという話は聞かれなかった。現在にいたるまで、継続して山林として利用してきたようだ。

（木浦の地図をみながら）木浦に地名のついたのはなか。ツルノハゴイ（つるのは越）という道があった。この曲がりから。ここ。山道さずーっとここに入って、ここまできた。ずっと坂道。これはうちも近かった。カセの。これは白岩？。ここは野際。こっちは。タナカワソはバン。字名のホリキリですもん。これはホンタオゴエ。金山道からずっとあがっ

たところ。で、ここに５０戸。家はもうなか。（住んでた人は里に）降りてしまった。スギノクボに降りていく。トンマツゴエ(飛松越)。下のところ。

## モリの残り木

（地図で位置を示しながら）ここ（氷室家のある場所）は吉城のムラシタ。こっちは字名がモリノイシ。むかしはここ一帯はずっと樫の森だったらしい。それを炭焼きやら杉の植林なんやらで、今はもう木がのうなった。炭は現金収入になったから。神社に一本だけシラカシの木がある。あれはモリの残り木。タブの木は残っているけど。カシの実なんかを食べた記憶はない。シイは伐らなかった。シイは池山に多くて、拾いにいったことがある。

## 池山・池ン平について

池山って、阿蘇山の噴火の時に、４８池できて、そのひとつとか聞いた。池ン平は田んなか。池ン平は昔は池だったらしい。いつごろなのかは知らない。湿地だから松ノ木を沈めてる。牛も入れないレンコン掘だった。大正時代の、石で築いた暗渠もある。おそらく個人でやったものだが、名人が築いた暗渠。排水処理のモウソウ竹を下に通して、めくら暗渠っていう。池ン平だけ暗渠が石築き、上原に住んでる、柴田さんの父親が賭博で金をもうけて、野ッ原だったところを８畝、たんなかを作った。近所の人を日当で雇って、石を築いた。むかしは池ン平にサザレがいっぱいいた。サザレは今でいうホウネン海老のこと。食べれる。池ン平にしかいなかったが、今は農薬のせいで全然いない。

## 隠し田調査

調査には役所の人は弁当を持ってやってきた。共有山３０町を３町と偽ったのもあった。相続税調査のときなんかは、実際の面積が今まで言うとった大きさより５０倍も広かった、っていうところもあった。タナベさんところよ。余（アマリ）は昔ドブロク一升と交換した土地だっていう。それとか、調査したときに最後にあまった土地だとかいう話もあった。昔の世には何もなかったけど、金山が出来たときはふるった。フジダケという節の高い竹がいっぱい生えているところがある。おそらくあそこは金山時代に人家のあったところ。

## 焼酎・ドブ酒あれこれ

昔は焼酎一升の量り売りがあった。馬にドブロク甕を積んで登ってくる。それをちょっと試飲してから買う。甕はあとからラッキョウ甕にしたり、お茶甕にしたり。ラッキョウ入れるときは、桐で栓をして、竹で作ったので指しこんでラッキョウを取った。ドブザケは古い方がうまいって言うけど、実際どれくらい持つのかはわかんない。すぐ飲んでしまうから（笑）。飯茶碗一杯飲んだらな、もう、３日くらいは頭が痛い。イノシシを獲るときも焼酎でダゴを作って仕掛けておく。そのやり方を知ったのは去年。久留米の猟師に教えてもらった。イノシシが酒カスの匂いが好きだっていうのは聞いたことあるけど、でも焼酎のほうが香りがいいからでしょうな。イノシシも昭和３０年ごろかな、増えたのは。昔はソバでん何でん、畑で作っても来なかった。それがじきに足袋みたいな足跡が畑にたくさんあって、ヤギだと思ってたらイノシシだった。今年は７０キロくらいのを８頭獲った。

## ドブサケ取締り（森松さん談）

税務署から“何日の何時に一斉取締りがあります”という連絡が役場に入る。すると、自分の上の人間が「おおい、森待君。」「ハイ、なんですか」「ちょっと、鹿里に行って来てくれ」「ハイ、わかりました」って。こっそり取り締まりのことを教えに行った（笑）。だから自転車を一生懸命ひっぱって、（鹿里への）坂

を登って伝えに行く。帰りは自転車でしゃーっと降りていった。鹿里はシメイワイだ、なんだでドブザケ作りで有名だったから。まァ、こっそり連絡に行ったときはよう飲まされたもんです。

―地元にこっそり手入れを教えるのは他にもやり方がありましたか？

取締りのことを誰かこっそり教えてくれる人がいるんでしょうな。そしたら一人が連絡員になって。雨なんか降ってないカンカン照りの昼間に、笠と蓑をつけて村中を連絡員が自転車で走りまわるわけ。それが「明日手入れがあるぞ」っていう合図。それを見たらみんなドブ酒を肥溜めに埋けて隠したりする。でも、もしそのとき隠したドブ酒がだれか盗まれても、みんなおおっぴらに騒げない。まァ、だれが盗ったかは見当はつくんだけど…(笑)。でもドブ作りは違法だから、警察に「ドブ酒つくってを盗まれました」っていえんでしょ(笑)。盗んだといえば他にも内緒で栽培したタバコの葉っぱや刀とか。まあ、むかしは色々な話がありました。もう、笑い話ばっかり。

## 昔の食べ物

柿は25個で一縄。四縄で一連。だから合計100個の干し柿で一連。串柿も同じ数えかた。売買するとき、目安になる。冬は毎晩のように皮をむくから手間がかかる。皮は干して粉にしてハッタイコ。干してるのを盗ってくのは夜遊びとか消防団の夜警。うちのナシを○○ちゃん（名前聞き取れず）がこそっと取ってって、それをうちの親父に食わして。そして親父に「ああ、これはうまか、どこの梨ぞ」っていわせて（笑）。昔は犬でん、猫でん（食べた）。ネズミなんかも痔が悪か人に効くって。あとは滋養をつけるために金山の人が食べたって聞く。

## ヘコとふんどし

電気のない時代だから。夜這いもあったろう。着物だし。女は下着をはかない。男の下着は…。フンドシはヘコって呼んでた。フンドシって言ってもわかんないから兵隊検査のときには、ヘコに“フンドシ”って振り仮名がついてた。「ヘコ（ふんどし）はずせ」って紙が貼ってあった。

## 田んぼのこと

星野のたん中は、上の方が古くて狭い。分限者のほうが、上のほうのたんなか。それを後々、セマッダオシ（畝町倒し）で３，４枚を一枚になおす。水があるところが限られていたから、タンナカも狭かった。分限者の下の方には土の壁のタンナカもあった。イケンヒラは竹取の湧水から水を取る。ひびは漏れの原因となるので、下の土を踏んで歩いた。平成五年にビニールパイプで水を入れた。池の山の神社には雨乞いに筑後全体から来た。このあたりでの池の山の雨乞いの効果は有名。吉城での飢饉の話は聞いたことはない。苗は畑に作ると苗の活着がよいがイモチ病にもなりやすかった。摘田は朝倉ではやるが吉城ではやらない。

## 田植え

昔のもんっちゃ、えらかったばい。１人で１日がかりでだいたい３畝植える。苗とりもして16人ぐらいきて、１日３反植える。それが機械入ったら、えろう変わっとったい。だーっと植えてしもうた。田植えは10日じゃ終わるめぇ。旱魃の時はひまかける、20日ぐらい。そのあとさなぶり。お茶、養蚕、副業多かった。蚕を飼ってたときは、蚕を育てるのにタンカ（炭）で蚕の部屋をあっためた。寝床もなかった。育てるのは家中で大変だった。

## 金山の話

いまはアルカリかなんかみたいだけど、昔は水銀、水銀マギリって。昔のここらへんの川は水銀が水中でキラキラ光ってた。“星野村

の魚は食べれん”と言われた時代でした。鉱石をすって、黒い椀に入れて、水を張って見ることを「わんがけ」っていってた。それで砂金が取れる。砂金は商品価値があった。金山には上のほうに５０戸家があった。人形があちこちからゾロゾロ出てきよったとですよ。あれは、おもちゃやったろうか。茶畑や、ハレー焼・ヤマ作なんかするときに人形が土の中から出てきた。一時は金山、男も女も石の選工。女は方々からきた。あんこ小屋で爆薬作り。女工さんたちは、久留米から来てた。まだ若い娘さんたち。黒繻子の半襟に絣の着物。色とりどりの端布で作った前掛けを締めていて、裾から襦袢がのぞいて、そりゃあ、もう（彩りが華やかだった）。女工さんたちと小学校の子供の帰宅時間が一緒で、下校中の男子が悪さをする。女工さんの襦袢をぱッとめくって泣かせる（笑）。今で言うスカートめくり。でも、女工さんのほうも負けてなかった。今度はめくった男子生徒の両手を二人がかりでつかんで（笑）。そん子が泣くまで離さなかった。

### 地　名

さすけおとし　よねだおとし　うっぺぎ（露頭掘りの場所）　てんづめ　ほんづめ　ほんづめたに　とづめのたき　こーじんだ　三枚あげた（湿田）　たていわ

（本田　佳奈）

## 4.3.8 土穴

山口信一郎さん

調査員：森松詔徳（ツグノリ）さん（昭和六年生）

星野村役場同行者：高木

聞取者：服部英雄・本田佳奈・山田美香

### 地　名

シイモリダニ（椎の森があった。むかしは椎の自然木）　ナカノタニ（中の谷）　ニシノタニ（西の谷、サカイタニともいう）　ダイミョウジン（大明神）　キッタテ　ウマンコネ（馬の子尾根＊キッタテとウマンコネは大体同じ、キッタテのうちにウマンコネ）

カラタニ（この谷だけが水がなかった、何カ所か水の出るところはあるが、流れてはいなかった）　ハギノデラ（はぎの平）　ジュッツクリ（正月になると、猟師がきて鉄砲の撃ち初めをするところ）　ゴリョウ（りょうのかみさま、懐良親王の御陵、その前に堂、観音堂があったとか、山の神とか）　ナガサコ（長迫）　ワサフサンバレ（バレは畑のこと、明治から昭和、その人・わさふさんがもっとって、梨を植えた。戦時中から戦後に畑にした。ふつうの芋畑。その前が梨がうわとったげな。）

イワンモリ（いまは茶畑、森があったという説）　アガリタテ　ヒザツキ　ユノシリ　ナカオ　ゲイショウ　ゴアンダ（むかし久留米の有馬の殿様にご飯を献上した）　ゴクサンダ（御供・ごくう：もともとお宮、天満宮の持ち分、お宮に使う米を作りよった）。　テラダ（長尾の方、二カ所にある。もっと広かったらしい）　フウゾウダ（レンゲをフウゾウという）　フットデイ（ぽーんと出ているところをフットデイ）　ハタフキ（意味わからんですね）　ヤンブキ（山吹とは関係ないごとあるです）　ジョウド（いまでも大円寺の祖先の墓）　ホウキノウエ　ガランドン（井手口の上、お墓のあとか）　ヨツゲイ（四つ角）　ウッチンザカ　ナミダザカ（御陵に関係ある名前です）　ジデン（ゴクサンダと同じ）　イワンドウ　イデンミチ（井手自体に名前はない、谷の本流から）　アセシャンフチ　ハカンダン（墓があった）　ノンミズガワ　ゾウレ（ヤマブキの辺り、地滑りがある。ズルからきたものか）　シミズガワ（水が湧いている）　テランウエ　カジヤ　ロウヤ　モリノマエ　サンヤサンダ（さんやさん

参り、田主丸にある目の神様）

### 草切山・赤土取場

ずーとむかしは鹿里（ろくり）との共有林、草切り場所として使った。いまは畑になっている。土穴そのものには草切山はない。
井手の赤土取場が決まっていた。

## 4.3.9　宿の谷　8月21日

中司(なかし)政男さん（昭和１０年生）
聞取者：服部　渡邊
地　名：ホトケンクボ、トヨノシバ、ウーヅツミ、コヅツミ、カラツヅミ、ナガタ、フドウサンウエ、ヤンブサン、ナナマガリ、ユゴダン

昔、ここには、山伏の宿があった。阿蘇の山伏が、黒木、高良山からここで修行。山伏がいた。禊の滝で修行をしていた。落差１０ｍはある。ここの不動さまは七百年ぐらいたつ。そこが宿坊。護摩焚きはもとは室山で、いまは池の山でする。

祈祷人さんがおった。その人は、浮羽の「やべ」から来ちゃった。不動さんに泊まっていた。６０年くらいまえになる。毎月二十八日、八の付く日が、不動さんの日だった。その日は、禊をしたり、護摩焚きをした。しょっちゅう禊にきちょったひとは、赤ら顔の女の人だった。おととし、一回（禊を）しとろう。浮羽のもてぎ（持木）の人。とよちゃんがしっとろう。

祈祷人は、この近所をじぶんで回る。風邪におうた、病名がわからん、突然の病気に、祈祷さんに見てもらっていた。ホトケん久保ってたんぼがあった。出世した人は彦山に行った。修行の本家。薬草はゲンの証拠に、センブリ。このあたりにはセンブリはいっぱいあった。あんまり取りに来て（皆がいっぱいとったため、今はもう）なくなった。牧場を作った事もなくなった理由の一つ。ここらへんは湿地帯、きわだ（黄皮）はここにはない。仁田原（ニタバル）のほうには、きわだ、ダラなどがあった。ダラはイゲ（棘）ばっかり。

宿の谷は、ヨシビだらけ、高冷地植物で、標高３５０メートル以上、高い所だけに生える。下では枯れる。毒があるから馬でん牛でん、まるで食べん。牧場に放してるけど、よしびの葉っぱを食べることはない。

ヨシビはカボク（花木）にした。東北自動車道などの中央分離帯などに植えられた。とても景気が好かった。次から次に売れた。笑いが止まらんほど、札束を数えている間にまた売れた。

ヨシビは、盗人馬場（ヌスットババ）にはだいぶしてある（多く栽培されていた）。
―どうしてそういう地名なんですか。

ヌスットババは、昔盗人が逃げ込んだ、とか近所にぬすどが住んでいたとか、ばあちゃんが、そういった。あんまり名前が悪いけん、すかっさる（いやがる、この名前で呼ばれるといやなので）、東山ともいっている。りっぱな田がある。すんどる人も気のきいとる人やったけど、いま病院。

ヨシビは「あせび」（馬酔木）ともいう。猛毒、煎じて飲めば人間も危なかろう。だけど薬にもなる。農薬前はその薬で害虫駆除。大根に付く虫などを退治していた。牛のしらみ取りには一番よか。背中に流す。人間のしらみにも効いただろう。今の農薬のような害はない。

よしびの木の根をたたくと汁が出る。もう時効だけど、むかしの年寄りが川に流した。室山の下で（よしびではなく）ゲランをなげた人がいる。ゲランは南方の毒の木。魚が酔っ払ったようになる。腹を上げて浮く。そのままにしとくと死ぬ。支流があると、水がきれいで生き返る。一番ふとかのを取る。どっちみち、食べきらん。毒に当たった魚だけど、人間が食べて毒だったとは聞かない。水が少ない時じゃないと、きかん。真夏の今頃だろ

う。何年かに一回のこと、いっぺん流しても周辺の水のしみ出る。すぐ戻る。

ここは開墾地。高野庄太郎さんて、明治の人。その人がはじめ。明治の池はコンクリが使ってある。そのあと７５、６年前（１９４６頃か)、補助金が出て開かれた、１反いくらって。村から村有林の払い下げを受けた。その昔は、原野、よか野っぱら、なんにも使ってない荒れ地でしょう。水路が村と村との境になっている。

うちはおやじが入植。矢部村のタンノウ。ダムができる前、ばかだねぇ、川端に五反ばか田があった。あと一年おいてありゃ、ダムの補償が入った。仕事がなかったんだろう。ここにきて６７年。石井さんが１年半ぐらい早い。吉井のエンジュウジの人。炭鉱から来た。多くて九軒、七軒なり、五軒なり―

村有林は切ったあと。自分で切る必要はなかった。借地料とかは払わん、下草取りせんから。ハレー焼きして、そばとかノイネ、粟とかを作っていた。いまは、畠に芋を植えるぐらい。ハレーの芋がものすごう、おいしい。

ウーヅツミ、コヅツミ、カラツヅミがある。仏ンクボは田があった。１０年までは作っていた。トヨノシバは芝だらけじゃろう。ナガタは不動さんのうえ。ウーヅツミ、放置してあるからいまは村んとになっとる。田植えの時は、ウーヅツミの水を抜いていく。3日おきに上から順順に。

11月に、ウーヅツミの水を抜く。空にはしない。３０何年前、魚をとる時、空にした。ふながいっぱいいた。所有者は私。子を5000匹近く入れた。バケツに三杯。そのフナが自然繁殖。鯉はうだききらん（大きくて抱けないくらいだった)。そりゃ一力のつよかもん。冬にはふなを食べる事ができる。うろこがたいへん（取ってしまわなければならない)。フナの刺身は鯉よりよか。鯉はうろこをとらなくてもよい。うなぎなどは、滝ものぼる。鯉はのぼりきらめぇ。

池は明治の池。旱魃で空になったことはない。雨乞いしたことはなかろう。（家の前の）湧き水の名前は知らん。山伏がおればわかるばってんねぇ。すっぽんが１匹いる。アブラメは自然にあがってくる。

石垣をついた田はあったがブルでつぶしてしもうた。とよのしばあたり、石垣はちーとあった。石垣は、明治についた。壊れたことはない。雨がふってもここがはじまり。うえからどーっとくると、石垣はくえる。石垣さん、こんにきじゃ山種ふじおさん。頼むと高いから自分でつく。

電気が通るようなったのは、昭和40年頃。テレビが入ったのは、いつか、みーちゃんが昭和38年うまれだから、その頃。その時は、テレビはあるが、電気の無い状態だった。テレビも無えげな、っておよめさんがこない。それでテレビだけ買って自家発電で見ていた。テレビは夜だけ、１１時になって発電力をスローに落とす。画面が暗くなってみーちゃんが泣いた。2年くらいたって電気がきた。むこうのおかあさんが、写真見てよか、って決めた。場所みんでもよかですか、よかならよか。嫁さんのかお、みらんで結婚した。祝儀の時、髪型で嫁さんだとわかった。「ああ、あれがオレの嫁さんか」。昭和三十六年だった。およめにいったその月にできた子どもの事を、かまぼこばら、いたつきばらという（いったその月にできた子どもだから)。みーちゃんはそれだった。

茶屋が谷(チャヤガタニ)、炭床(スミトコ)、大牟田（オオムタ）は一緒の講組み。浮羽のながたん、二軒しかないけど、ここもいっしょの講組。歩けば炭床から十五分。こどもは星野中学に通っていた。隣部落のような感じであり、町村境を超えて親近感があった。それも道路ができてしまうまでの事だった。

村有林は２７町、(長谷に？)管理をしてもらった。大牟田オオムタには１０町ある。

昔は、小学校までは車力道、下り１時間半、

上り２時間。あさ、給食食べるころに着いた。それは冗談、でも一時間目が始まってから着いた、授業が始まっていたことは間違いない。牛を飼っていたら、家を留守にはできない。水をやれば、牛は何とかなる。

茶屋が谷、大牟田は土着の人もいるし、入植の人もいる。入植の時、大きなお腹してた母親もいた。

（渡邊太祐・服部英雄）

## 4.3.10 風月原（ほおづきわら／ふうづきわら） 8/21/2002

田中土夫さん（大正一四年三月二日生）
聞取者：服部・本田・渡辺・原口さん

### 川の名前

ドンブリっていう淵があった。ドンブリには水浴びに。アブラメとうなぎはずうっと大牟田のほうまでおったですもんね。大牟田の滝にはこげな（大きな）うなぎがおった。ヤマン神んところのカーブんとこ。名前は…さあ、何ちゅうんじゃろうかなあ。今は水はちょろん、ちょろんでしょ。あそこも昔はどんどん流れよったですもんね。

### 山　林

山には天狗岩ってあった。昔は二つ岩になっとったが上にかさなっちょった岩が、地震かなにかで崩れて。頂上じゃなか。（地図を示しながら）林道よりも下。だいたいあのあたりの字はクラギ。うちの焚物取りの山は東のほう。その山は３軒で持ってた。大体（うちの）はじまりは小作じゃったろう。もとは地主の山口コウゴウしゃんとこの山。社会党の農地改革でね。ここらへんの地主はコウゴウさんと岩田さん。

### 風月原の棚田と石垣

―小作米は大体半分くらいですか？

さあ・・・（しばし考えて）やっぱ、３分の２じゃったろうか・・・上納は３分の１。あたしもはっきり覚えん（覚えていない）。自分が本格的にはじめたときは、もう農地改革のあとだから。シンビラキは今、橋がかかっているところの手前。ええと、あん道路は開墾道路。

―このあたりの石垣の田、誰がつくったかわかりますか？

石垣をついた人はもう居らんじゃろう。（自分にも）誰がついたか分からん（一部）。あたしどんの前の田んなかも、10枚くらいの、こーんまか（小さい）田んなかやったったい。あたしがセマッダ（畝町倒し）して、自分で石垣ついて5枚にした。あたしが戦争から帰ってきてからやけえ、昭和23年か4年くらいでしょう。補助金はなかった。セマッダオシで補助が出たのはずうっと後の話。たいがいここの人は自分で石をつきよんなった。

―それは自分の労力だけでついたから、お金はかからない？

ああ、そうたい。金はかからん。労力だけ。田んなかに牛やら馬をつかったでしょうが。後は機械になって。あん頃（終戦直後）は他所に行って賃稼ぎするあてが無かったでしょうが。だからセマッダオシをやった。田んなかにこげな太か石があったとを、発破、火薬でね。割ってどかして仕事をしやすうして。セマッダオシは何年かかかってした。農閑期に。少しずつやって、10枚を5枚。高さもまちまち。低いとこもあれば高いところもある。農閑期のヒマをハザマっていうでしょうが。だから農閑期にセマッダオシするのをハザマ組って言って。“あそこのたんなかをハザマ組がしよる”ってね（笑）。農閑期になると“ああ、またハザマ組がはじまった”って。」

―セマッダオシのとき、もとの床土はとって置くんですか？

床土は・・・はい。くらす（土をかやす）ってしょうが。だから取っておく。開いた（セマッタオシ）とこに置かんにゃならんですか

ら。セマッダオシすると面積は増える。そりゃあ僅かじゃろうが・・・まァ、ちいっと、田んなか三枚を一枚にひろげたら、畔三本あったが、一本になって。畔の数が減った分、田んなかが僅かな程度で。セマッタオシの前、10枚の田んなかのころは石垣はついちょらんでドハ。ドハをセマッダオシしたら大分広うなる。もともと何十枚あっても１筆じゃったが、国土調査で分筆して10枚になっとった。はア。そりゃあ、法面（のりめん）、畔分があるからですね。

―国調以前、台帳上の面積は実際より少ない、ということは、その分はホマチ（ヘソクリ）というか、マツボリというか、そんなところでしたか？

そん頃は(役場も)何の気にもとめてなかったですからね(笑)。若干広くなっても。ただ、何年からか忘れたけれども、その後からセマッダオシに補助金が出たですもんね。そげんなると、やっぱりきちんと役場も面積をはかっとったけど。」

―セマッダオシして、収入が増えた感じがしましたか？

ううん～。やっぱ急に、ああ広くなった、（野良仕事や暮し向きが）楽になったァ、っちゅう風にはなかなかならなかった(笑)。ただドハや畔の分だけ（若干）広くなって気持ちがようなった、という程度でね。気持ちだけ楽になったような、そんな感じで（笑)。」

―ハレー焼はしましたか

はい。今はもう、造林はせんし（山を焼くのに）やかましか時代。前は山火事がちょいちょいありよったですもんねえ。ハレー焼きをしないと、そのあと植林して木が育たない。麦は作らんじゃった。野稲にソバ。サトイモ、トイモ（サツマイモ)。あとは自家用のお茶。ハレー焼したら自然とお茶がでてきよったですもんねえ。今はもう作りよらんけど。もう・・・星野はどこん山伐ってもお茶が出てくる。天然のお茶があったですもんねえ。

―昭和23年のセマッダオシの頃は、他の人たちもセマッダオシ、してましたか。

はい。あんころは一つは復員や引き上げで帰ってきても仕事がなかったからですね。やること無くて、農閑期にセマッダオシをしてた。

―じゃあ、僕達が見ている棚田は終戦頃のセマッタオシの棚田ですか？

いえいえ、そりゃあもっと昔からやっとったでしょ。終戦時期のセマッタオシは棚田のごく一部。ここ（田中家）に上がっていくところの田んなかは昔からずう一っとある。家の前あたりのが、終戦後のセマッタオシの田んなか。ああ、自分でしたんじゃ。

―井堰はどこからひっぱるんでしょうか？

川から。井堰の場所？いやあ、堰っちゅう堰はなかですもん。谷が狭いでしょうが。だから石をちょっとならべて。それを土で止めたりして。土嚢は使わんですよ。石と砂だけで。水はまあまあ、今年は潤沢。もう川ん水もすくなか。旱魃は何年か前・・・平成5年。ここらの田んなかは、食うしこ（分）は、どうにかこうにか大丈夫だった。私としちゃあ、（旱魃で稲が全滅したということは）しちょりません。３分の１になるくらい。まあ仮に五俵の田が一俵半になるような程度。持ってる田がすべて全滅っちゅうことはない。水があるところは（通年とおりに）出来る。

## 若者のこと

―青年宿はありましたか？

公民館はあっとです。青年宿みたいなものはなかった。公民館に寄り集まったが若けえもんがそこに寝泊まりする事はなかった。力石もない。でも上原ん方にはあった。今はその石があるじゃろうか。どうじゃろうか。そん上原の力石を持ち上げたことはあたしはない。あたしとこの親父やら、の。親父はやった。

夜這いなんかァ、ここはない。星野じゃ、

そんな話は聞かんですね。夜這いは浮羽のほうで話には聞くが、星野村にはない。浮羽じゃ夜這いをしかけて板の間のだご汁鍋に足をつっこんでしもうたとかね。昔はおおーきな鍋じゃったでしょうが。そして板張りにそのまま鍋を据えよったでしょうが。それとか娘に触ったと思うたら、そん娘の親父の頭じゃったげな、とか（笑）。こっち（星野）はそんな話は聞かんですよ。はい。浮羽からはお茶摘みのころに女ん人が手伝いにきよった。男が遊びにやってくることはなかった。

## 馬のはなし

—センゾクまではどれくらいかかりましたか？

あたしどんは行き帰りで5時間。半日かかりでセンゾク行って、鉄打って。稲吉さんの親父と馬をひいてった。蹄鉄打ちは、役場の仁田原の方に、チヂイワに一軒あった。イチギの山下マサオさんとこにも打ちに行った。あたしたちが連れてったのは山だし馬。親馬。仔馬じゃない。山だしすると、足が擦れっでしょうが。

—一年に1回くらい、テツを打ちに行くんですか？

いやあ。一月半もてばいい方。

爪が伸びるでしょうが。して、もう腐れる。だから爪だけ切ってね。

—馬は足を洗わないといけないんですよね？

そのままにしていると腐って病気になる。馬を洗ったのは、家んとこの少し深い淵。一週間おきくらい。洗うときは自分も腹まで水に浸かりよったもん。冬場は洗わん。尿で足が腐って病気になるなんてことはなかった。馬小屋に敷く下草を清潔にしとったらね。病気にはならん。清潔にせんと、カブト虫が出来よる（笑）。馬んくそ虫っていいよったですね。それがカブト虫よ（笑）。カミキリ（くわがた虫）は木に出来よっけど、カブト虫は馬ンクソ虫いうて、馬小屋にできる。昔ァ、こげな太かサナギが馬小屋ん中にゴロゴロしよったです。

## 反当と井堰

—風月原の田んなかは、反当どれくらいですか。

まあ・・・今は反あたり五俵。昔よりはできるようになった。昔はもう、ほんな（本当に）、ね。草と馬ん肥を使ってたけん、三俵。今は肥料がよかけん。昔ん田植えは三反ばかし作って、植えるだけで一週間。嫁御と一緒にやった。時には人を雇いよったです。手間結いしたり。畔塗りがもう・・・半日で腰が動けんごとなる。きつうて、せいぜい2時間。一日中なんてできない。三反あって畔塗りは４、５日かかった。畔塗りが一番の苦労じゃった。畦に大豆を蒔きよった。（人が）通る畔に蒔いて。だから人はまたがって歩かんといけんから、びっしりは蒔かん。歩幅にあわせて植えて、上を人が歩けるようにした。畔も休ませることはない。それで豆腐を作ったりですね。きなこを作る家もだいぶあったでしょうね。畦豆といった。機械を使うようになっと、機械は畔の草まで切ってしまうでしょ。そやけん、だんだん、畔にマメをつくらんようになった。今は畔コンクリがおおかでしょうが。畔塗りがのうなって楽になったが、コンクリにしたら今度はお金がかかる（笑）。昔は労働力軽減を目指しとって、畔コンクリにするとき、補助がでるようになった。役場は畔コンクリを何メートルつくったか測りにきよって、それで役場から二割の補助金が来よった。」

—用水・井堰はここらの田んなかに何箇所ありますか？

井堰はたいしたもんはないし、名前もついちょらん。柴田ジンちゃんところにあるけど、ばってん、あれもたいしたもんではないで。ビニル管ですもん。たいした井堰じゃなかですもん。前は竹樋（たけとい）じゃった。じきにパイプやらホースやらでの。そうせんと

田に水があがりきらんですもん。
一前田の用水は？井堰は？
パイプで（水を）引いちょる。昔は井堰はまだあった。東の方にあったが、ばってん、水が（田んなかに）あがりきらんもんで。前田の田んなかには、そん東のほうの井堰の水を使いよった。ばってん井手に水があがりきらんもん（笑）。ホースでなきゃあ。井堰に名前はついとらん。ああ。
この付近は山栗が多かったですね。椎はあった。カシはこの辺じゃない。役場の近所にはカシ山があったが。このへんは杉山になって。山林は地主のもん。やっぱ同じ星野でも土質が違うでしょうが。こっちゃあ、山ツツジとかアシビとか多い。あとクヌギ。風月原はシイタケはやらん。」

### 戦争体験

わたしは４男坊。兄二人は同じ巡洋艦に乗って、一緒に沈んで死んだ。ソロモン海峡で沈められて。二人の死亡通知を受けたがわたしの入隊の日じゃった。もう一人の兄は最近死んだ。昭和18年に満州で直接入隊。終戦後はシベリアにゃあ行かなかった。わたしは終戦後は満州の、撫順炭鉱で鍛われたが、1年で帰ってこれた。コルトから、貨物船で引き上げて佐世保に帰った。炭鉱じゃあ、わたしは独り者じゃったから、危ないところに堀りに行かされた。とにかくもう、100人くらい一緒んとこでけのう。収容所の入れられてしもうて、炭鉱で鍛われて。

（本田佳奈）

## 4.3.11 本 星 野 8/23/2002

樋口千佐雄さん（昭和３年生）
奥さん
樋口さだよさん（明治４１年生）
聞取者：服部英雄　本田佳奈　渡邊太佑

### 本星野の通称地名

ジュウダン　オーヤブ　ジゴク　シラミズダン　アカミズダン　ヤヘイゴエ　ゴンゲンヤマ　イデカクラ　ウッヂョ　ゴンゲンヤマ　マゴイケ　クボゾン　ウゲイシ　ウッヂョーダン　ジゴクダン　オギノ　イワヤ　ナガブチノウエ　ヤケノシタ　ナマズブチ　ジュウダン（十段）　アサヒヤテ

### 本星野の地名

（地図を示しながら）ここはババヅルっちいうのがある。だいたいこん道。馬場ヅルの道は馬場の道下と馬場の道上になっとる。ここはオンニシ、オンニシっちゃどげん書くか知らんけど、字（小字）。タンニシ、タンヒガシも字。オンニシんつぎは、たしかジュウダンっちゃ。ゴリョン川の谷ですもんね。あそこ字なんかでだいたい決まっとる。ジュウダンは小屋んところの近所。あそこ田んぼは段々になっとりますもん。だからジュウダンっちいうのかなあ。今は茶畑になっとりますが。もともとは田じゃから石垣はついてある。あそこは水がたまりよったもんねえ。山ん水で田んぼをつくりよるっちなかったちゃろうかと思うばい。ジュウダン、ジュウダン、ダンクンダンっち(呼んでた)。下のほうからずうっと段を組んで10段あっとじゃなかろうか。
カネヤさん方の田んぼんとこは確かオタニっちゃ言いよったよ。オタン。ゴリョンサン川のお宮の近所ですね。（地図で場所を指しながら）こけえ（ここに）橋があっとったですたい。そこをオタン。谷の名前。今ァ、県の土木事務所が橋の名前を勝手につけとっちゃん。もともとの名前は知らん。あとはヒガシダンっちとこがあった。

### 戦時中の子供達の労働

森林組合の裏に三段ばかりの田んぼがありまっしょうが。昔、戦時中に一列100メートル

くらいに、尋常高等小学校の生徒さんがぜーんぶ一列に並んでね。そうやって田植えした写真があったが。探したがなかったもんなァ。昭和12年ごろ。

## 通　学

うちは大きな北海道産の馬をもっとりましたもん。それで田んぼもあれして。親父はシナ事変で死んで。その時分（農業高校の学生）の頃から、田んぼを作って。農業高校に通いながら。旧制中学３年生の頃、終戦。馬で田圃をおこした。八女まで２０キロくらいありますもん。いまんごて道のよかもんじゃなし。道は細うてガラガラ道じゃったで。今思うと、よう行ったなァー、と思ってから。そっで自転車は、毎日乗ってけば、パンクしたりチェーンが切れたり。3台くらいつぶしましたもん。後にゃあ、もう遅刻ばっかり。

昔はここのじいさんが木炭を焼いてこの家をたてたらしか。わしは「跡取じゃけん学問はいらん」ちゅうこと言われましたけど、でも、自分はどうしても勉強したくてですね。自転車で八女まで通うて。終戦時分が農業高校の三年生で、学校でてすぐ農業試験所に入りました。そうして、ここの家（樋口家）に跡取がおらんごとなって、（養子として）家内と二人で跡に入った。実際の自分の母親は隣に住んどる。95歳でね。95じゃったかね、父親が死んだは・・・そって、3年かかっとですたいね。こん家が建つのに。さっき言ったじいちゃんが自分で松ノ木やらスギやら自分で切ってつくったらしい。自分でやったから3年かかった。みんなで働いて。そんかわり、朝の3時に起きて山の炭窯に行きよらした。

## 山 の 話

―林業が主でしたか？

はい。でもまあ、親父が生きとる時分にゃあ、田んぼが１町歩くらいあった。でも半分ずつ分けて。太か馬をおいとかんとでけん。うちだけじゃったよ。そんな馬を使ったのは。他の家は牛くらいですね。草切りに行ったは―大山んほう。ここはウゲンイシ。殿様の籠据え場っちゅうのもあった。ちょっと高うして籠をすえられるような場所。久留米の殿様が通ったらしかです。どっかここん（地図で場所をしめしながら）近所がカサハラ越。で、ここがトオゲンダンって。ここん峠はウゲイシトウゲ。ここまで歩んで草刈。こから１時間以上はかかる。自分できて、いのうて（背負って）きて ― 午前中にだいたい２回は行った。馬行くなら一駄積んで一回で済む。篭は、あれは40キロくらいありますもんねえ。草刈して乾かした草は冬用。生草はその日にうちに切って。むかしはもう貴重な労力じゃったです。何でも人より馬が先。馬小屋は外に作った。添田かどこかにゃ家んなかに立派な馬小屋がつくってあったが、ありゃあ珍しかった。

―この谷は？トウゲから流れてくる川は？

ウゲイシトウゲに行く道の下にある川です。あそこは・・・金山の方から流れていたが・・・何ていうたかろうか。横に流れているあん川は・・・。字にはシラミズダンとかアカミズダンというのがあった。金山よりも昔はあん川のことを何ていうたかな。あそこは昔は金山。昔白水だったが赤水にかわっとったですたい。昭和１４、５年頃には金山が閉山。

## 金山の最盛期

―金山が出来てから地名が変わったんですか？アカミズからシロミズへ？

はい。そうです。あだ名じゃなかろうかな。アカミズダンとかシロミズダンとか。あたしどん時分はですね、そこのたっかか（高い）山をヤヘイゴエ（平小屋）って呼ぶ。自分が40町歩もっとる山はジゴクとか。ジゴクはもう岩ばっかで行かれんような山。そっで・・・ウチのそこの庭石は金山の、ヤヘイゴエの石ですよ。記念にと思うてね。金鉱石ですたいね。もうどこも金山の穴だらけですよ。あら

ゆる鉱脈を掘って。ウゲイシっちゅうところも金山。うちの山の峠は断層ばっかでそこをずうっと掘ってあってね。あと、アサヒヤテ（小字、朝日当）は朝日が早うあたる。アサヒヤテ、ちゅう呼び名は星野村のなかで何箇所かある。ハシラバルの上もアサヒヤテってある。あと谷の名は昔の人がよう言ってたが思い出せん（後述）。

イデカクラは部落の上のほう。アサヒヤテの手前。ヒガシ谷の上。そこのあだ名がテラノウエっていいますもん。大昔、お寺があったって。部落のほんの上に。その近くにイデカクラ。それからウッジョーっていうところもある。合戦場だったって言う。

シラミズをあがったところ、40町の山をジゴク。一番高い山をうちでは権現山って言う。ケンブツジョ（見物所）は峠のところ。戦後まで見物岩には石仏小屋があったが、お参りする人が登るのが大変だから、ムラのお宮へ降ろした。今お宮には見物岩から降ろしてきた20体の仏さんがある。あれ、背中にかろうて降りて来て。一番重くて４０キロくらいあった。

マゴ池は今茶畑になっとる。道路の土を捨てる場所がなかけん、ここん池を埋めた。
ジゴクはスギ山。もう自然に、雑木に戻そうと思うて切らんで放ってある。

部落の山は金山に売ってしまっとる。うちだけはじいさんが売らんかった。穴は掘らせたが山は売らなかった。今でも山に行けば、穴がこォーしてから見るくらい、深く掘った跡がある。ジゴクは断層でスギなんか植えてもストーンって落ちてしまう。危なかですよ。昔は住友が鉱区権をもっとったらしいが今は違うらしくて補償も何もされんです。
―金山の最盛期はいつでしょう？

一番の盛りはちょうどシナ事変の始まった頃の昭和12、3年。星野村の人口が1万2000人くらいあったって。今は4000人くらいじゃろうけど。東京や北海道あたりからも来て。ヤケノ（小字）の畑は全部鉱夫の住宅地。ずうーっと。映画館もあった。キジアイってとこ、精錬所が一番にぎわいましたもんね。金鉱石のうんと出たときは街が3日も賑わったというようなね。

ヤケノはもともと草地かなんかじゃったろうが、それをうちのじいさんが朝鮮人をば雇って開かせた。水田にしたが、とうとう水が来んやったけん（こなかったので）、畑にして。30町ある。金山のときはそこに住宅がたっとった。わたしどんが同窓会すると、子供の頃金山にいたのが今でも２，３人来らっしゃる。昭和12年頃は星野全体が金山。チヂワが金星金山、向いのが太陽金山。会社が３つあったかな。

うちは農業はふとくやってたから、ヤケノの住宅に下肥をもらいにいった。お礼に米をやってね。そん時分にはちょっと開かるる所は段々に（棚田に）つくったところが大分ある。

## 朝鮮人労働者

朝鮮人を金山の手掘り時代から使ってたと思う。あたしたちが小さい頃はもういた。朝鮮人の部落もあった。ナントカ、カントカ、ペラペラペラペラ～って、分からん言葉で話しよった。長屋みたいになっとって。今問題になっとる強制労働じゃないけど、まあ、雇いよったわけ。女ん人は畑仕事にやとう。落穂をひろってもって帰ってた。戦後になってたいがい帰った。でも土木が上手い人やなんかは残ってくれと言われたようだ。他に焼酎づくりがうまかった人なんかは残らんか、って。ヤミで作ったもんね。

## 隠し田

どこからも見えないところにこっそり作る。おおやぶの田。地目は畑（山林か）でもハレー焼にした。くぼぞん＝うげいし。
・本星野がお茶の一番の産地。

・家の前の石垣は戦争中に作ったもの。物置小屋に土方が１０人くらい住まわせて、１カ月かかった。
・くろよどんの五軒・・・「自分が死んだら田圃の見えるところに埋けてくれ」と言った。

### 明治の人の記憶

母親が詳しかばってん耳が悪かですたい、一方的に話っさっしゃるば（話すので）。会話にならんもんね。」と言って、今年94歳になる明治生まれのサダヨさんを連れてきてくれた。最初樋口さんご夫婦は、耳の遠いサダヨさんでは会話ができないと躊躇していた。奥さんに付き添われて隣の家からやってきたサダヨさんは、地味なワンピースを着た小柄なお婆さん。サダヨさんの隣には奥さんが通訳で座ってくれた。なるべくゆっくり話をしたが、私の声はサダヨさんの耳にちゃんと聞こえていた。テキパキと笑い話も織り交ぜながら昔がたりをしてくれた。（以下MDが無いため箇条書）

1、ハレー焼のこと
2、くぼどん作物・・・ここの家では焼畑を山作という。いも、あわ、そば、
3、ハレー焼きをしたのはアサヒアテ、トヤ、オギノという山。
4、本星野の通称地名
［アカミズダン］川。ながれる水は少ない。
［ウッヂョーダン］
［イデカグラ］
［ヤスケゴヤ］
［オギヤダン］地獄から流れている川。
［サコ］地獄のとなり。フッヂョーの間。
［ナガブチノ上］清水さんのところの淵の名前。
5、「岩屋よりずっと奥。クスノキザコ、オオギ、扇のようになっていて、山作をした。」
6、「見物岩から有明海が見えた。その下は絶壁。松ノ木が岩を抱えてた。」
7、「くろえもんの墓。神社近くの田んなか拓く。川石に文字が刻まれている。」
8、「ふくおさんの拓いた田んなかでは、拓くために雇い人の納屋がいっぱい建っていた。雇い人の小屋は昭和１０年頃には、やけのした、やなばのかじはらひできのところ、消防の詰め所の三カ所に納屋があった。」
9、「金山では三時と五時にサイレンが鳴った。すると、彼女たちは自分で朝鮮人、帰れーといって帰っていった。彼女たちは稲刈りや炊事の手伝いに来ていた。お弁当を持ってきていた。高菜を細かく切らずに一枚のまま持ってきていた。唐芋（といも）や根堀に来た。すると、芋の茎をもって帰ったのをみて初めて芋の茎が食べれることを知った。トイレをするときも、自分たちは脚絆をつけて腰巻きで仕事をしていたけれど、彼女たちはチョゴリだから、そのまますっと座ってしていた。」
10、「田畑に油をまいた。防虫。油は鯨ではなくカラシ油。それを竹の筒にいれて穴を開けてポツポツ落としていく。そして足で油の落ちた土を根本に蹴り込んでいく。このとき稲穂が股の内側にこすれてとても痛かった。」
11、「舅のとらまっさんのじいちゃんは働き者で、寿命が短くなるだけなのに、人の山で炭焼きしてた。明け方一番鶏のころ、三時頃にはもう山に入ってて、朝になって朝と昼の弁当をもっていった。」
12、「ナマズブチいうところには、こんま（小）か穴から冷たい風が吹いてくる。」

（本田佳奈）

## 4.3.12 山口地区

山口俊雄さん
聞取者：渡邊・岩成

### 聞き取り調査で採集した地名

（ワタゼノウエ）、ナカノタニ、上松ノ野、オ

ヅメダニ、モトヤマダニ、

## 耕地と水利

山口地区の灌漑系統は四つある。

（a）小字イゴヒラのそばにある谷から取水するもの

この谷の脇に山の神が祀ってある。その付近より水を引いていたらしい。この水はヒサゲゾノの水田にかかる。以前は、道上・道下ともにかかっていたが、近年は水が少なくなったこともあり、道上の水田のみにかかるようだ。

山の神が祀られている位置と水源が近いということは、何か意味があるのではないか、と考えさせられる。

ヒサゲゾノのヒサゲは、あるいは樋下ではないかと思われた。昔の取水方法を示す地字だろうか。

（b）地名ムラウエの谷から取水するもの

谷水が、ムラウエのあたりから西北方向に流れ、家屋と家屋との間を流れている。次に、そこから流路を東南に変えている。ここから上松ノ野の北側を東から西へとはしる谷につながる。その谷水はここからずっと谷をくだり、熊渡川と合流する。

この谷のなかば、地図上の道路うえあたりに井手が設けられ、ムラシタの水田へと水が引かれていた。これで、ムラシタの水田をまかなっていた。

現在は水が少なくなったため、なんと三キロメートルも東の山中、カラサコからパイプで引水している。カラサコの水は、淡水海苔が養殖されるほど澄んでいる。

この水は、ムラシタだけでなくヒサゲゾノの道下の用水としても利用されている。

（c）地名ナカノタニの南側の谷から取水するもの

谷に名前はついていない。地図上の上松ノ野付近、道路が著しく湾曲している部分の道路内側に以前水田があった。この水を用水として使用していた。

（d）オヅメダニから取水するもの

オヅメダニより取水。それから一度貯水池で水をためておく。その貯水池より北西方向にある水田に水を送っていた。普段は、ナカノタニのほうから水を引くことはないらしい。ただ、渇水期にはナカノタニの余り水をまわしていた、とのお話もあったが人によって話が異なった。

現在、多くの水田にはパイプで水が送られている。そのため水利関係がわかりにくかった。

## 石垣について

山口集落は、石がすくないため昔はドハだった。

他の集落では、水田をつくる際など掘ればいくらでも石が出てくるので、それを使って石垣を築いたのだろう。だがここは掘っても石が出ない。昔は石垣のある水田は少なかった。

現在は山口でもほとんどの水田が石垣でかためられている。

## お茶栽培

山口集落の茶畑は昔より減っているという。昔のお茶は今のよりもずっとおいしかった、と力説されていた。

現在のお茶はある特定の品種を栽培し、出荷している。商品作物であれば当然のことだと思う。

ただ、おじいさんが昔を懐かしんでいうには、昔はいろんな種類のお茶の木を畠に植えていれば、それぞれの木が勝手に交配して「ブレンドされたお茶」ができていたらしい。これが一番おいしい、とのことだった。

（渡邊太祐）

## 4.3.13 広川原地区 31/10/2003

平島正雄さん　　（明治４２年生）
鶴田勝さん　　（大正１２年生）
聞取者：渡邊太祐・藤本維佐武
聞き取りで採集した地名
**広川原地区**
ヒビラ、キタビラ、カラサコダニ、カラサコ、クマド、クヌギヤマ、カラタニ
**滝ノ脇、二双地区**
モンノサキ、ユズルノハ、イガワノサキ、フドウノタキ、クロツカヤマ、フシハラダニ
本山ノ上

## 水利・耕地と集落の歴史

### 広川原地区

現在、熊渡川の左岸にはヤマメの養殖場がつくられて跡形もないが、昔は水田があった。まだ石垣は残っており、往時を偲ばせる。

水田跡地のすぐ上流に井手がもうけられ、熊渡川から取水していた。水田の水はすべて川の水でまかなわれていたようだ。

広川原付近は金山の採掘所として名をはせていたころがあった。およそ大正時代にピークを迎えたようだが、その後衰退した。金の採掘が最盛期であったころ、養殖場の敷地は金山関係者の長屋がずっと並んでいた。何百世帯ほどもいたという。

ここにも華やかな時代があった。売店や銭湯もあったという。そのほか、家屋の周囲に水田が開かれているが、これらは田のそばを流れる谷水でまかなわれる。

たとえば、鶴田マサルさんのお宅は家の周囲に三反半ほど田を作っていたが、これらは全て谷からの水でまかなえた。石垣は、鶴田さんが生まれたときにはすでにつくられていた。生まれる二十年ほど前についたのではないかとの事だった。

田はすべて乾田だった。反当で四、五俵くらい。菜種や麦を田の裏作で作ったこともある。麦を五月の終わりごろに刈り取り、六月に田植えをおこなっていた。

### 二双地区

滝の脇地区の南側、公民館のすぐ東側に水田が数枚開かれているが、これらはすぐそば谷水でまかなわれている。

昔は、滝の脇地区のやや北、黒塚にも少し田があり、川の最上流、黒塚山あたりにも二箇所ほど水田があったという。黒塚山とは反対側の谷奥、ヤシタノのあたりにも田があったようだ。

滝の脇集落のすぐ北側の付近で二つの谷川が合流している。その合流点よりやや上流部、西側の谷川より取水する。ちょうど村中付近である。水は、山裾の等高線上を流れ、二双の水田にかかっている。舌状にのびた丘陵の上にひらかれた水田をめぐり、その西側の田にもかかる。そこから小さな谷をへだててやや上方部に水田があったが、これらはフシワラダニからの谷水と出水によっている。

こうした棚田の景観がつくられたのは、明治期ではなかったかという。詳しいことはわからないとのことだった。本山の水田はキンジロウという親方が作ったものだという。これだけは、誰が作ったものか記憶に残っている、とのことだった。

石垣が崩れたときくらいは自分で直すこともあるが、最初から全部を自分でつくるようなことはなかったという。

ただ、昔このあたりは千枚田だった。それをセマチ倒しした。三枚を一枚にしたりした。

ここの笑い話に、「雨降り蓑をどけてみたら、その下から田がでてきた」というものがある。

それほど小さい田が多かった。

ハレーヤキもおこなっていた。ソバ、ヒエ、アワ、イモ、ノイネなど。焼いた跡に野菜を

つくると虫がつかなかった。

ソバのハレーヤキは盆にする。盆を過ぎれば、ソバ蒔き。そのかえりに田の水を止める。十月の末には稲刈り。稲刈りが終われば、麦を蒔く。十一月の中旬くらいだった。そして五月に入れば麦を刈る。二十日くらいには、お茶摘み。手摘みだった。田植えは、六月八日だった。

このあたりの人たちは、平山に田植えや稲刈りの手伝いに行っていた。平山はここから一時間くらいでいける。そこはヤマダだから植えるのはもうちょっと早い。田植えの時期が異なるため、手伝いにいった。

「平山ではいつごろ田植えをしていましたか？」

「お茶まえだったねぇ、霜が降ったり、三月の二十日くらいに苗作りして、ハウスでね、麦？麦は作れんよ、苗を植えるんは五月のはじめくらいかねぇ、稲刈りはあまり変わらんくらい」。

稲刈りの思い出も多い。

「山が黒くなるんよ。稲刈りの帰りは。提灯つけたりして帰ってきよったねぇ」。

鶴田さんの青春時代

鶴田さんは、若いころ中国に渡ったことがある、とおっしゃった。

「満州開拓義勇団」という。

しかし、開拓自体は思ったようには進まなかった。「行ったところが悪かった」とはご本人の述懐。数年、満州で生活されたそうだが、もうここではダメだと思い、脱走したという。

「脱走されたんですか？」びっくりして問い返してしまった。「うん。でも捕まった、捕まったけど、逃がしてくれた」という。それなら無事に日本へ帰ることができてよかったですね、と心で思っていると鶴田さんはさらに言葉をついだ。「日本に帰ってきたら徴兵されて、鹿児島へ行った」。その後は、平島さんの工場談話に話はうつった。鶴田さんは兵隊時代のことはあまり多くは話されなかった。

今、鶴田さんのお話を思い返してみてもこの時代の若者はすごい時代を生きてきたのだと思わざるをえない。

（渡邊太祐）

## 4.3.14 金山１ （平成15年4月12日～13日）

（その１）後藤積さん（つもる、大正三年生）・ご夫妻（奥様大正一〇年生）

聞取者：服部英雄・渡邊太祐・伊東和博、教育委員会・森松和久

働いていた金山は初め矢野金山という名称だった。その後日曹鉱業に代わり、太平洋戦争が始まると半官半民の日本産金となった。損金が出てもその分は政府が補填していた。そのため赤字にはならない。二課あってふたり課長がいたが、ひとりは兵役で徴集、金山は昭和１８年に終わってしまった。政府が補償しきれなくなっていた。

夫婦共に金山で働いていた。積さんは昭和１２年、６つの坑道の現場監督と鉱石のサンプルを採集し、それを地図（マップ）に５メートル毎に記す作業をしていた。これによって金の含有量を調べていた。サンプルはまず小さな袋に一キログラムくらいの鉱石を入れ、事務所の横にあった分析所で分析を行う。このサンプルマップは坑道毎に作成されていた。ご主人の勤められていた山には６坑まであった。

金を採掘するにあたって鉱石はトロッコで運び出される。トロッコが使えるように坑道は横にまっすぐ水平に掘られている。石炭を掘るときに使われるような斜め坑はなかった。坑道内の広さは高さ6～7尺、横幅が１、５メートルも取られているのはトロッコを通すため。

高さは人がややかがみながら通れるくらいのものだった。坑道の崩れ落ちそうな危険個所には、松の木の支柱で岩盤を支えていた。鳥居のように木を組んで支えをつくる。支柱には松の木が最も良く、直径25センチほどの

ものを近くから伐採して使用した。

坑道に入るのは支柱を組む支柱夫と削岩夫、火薬係。専門化していた。坑道は水平に掘っていく。水平に掘っていたのでトロッコは自分で押して移動できた。坑内の移動にも使った。爆破させてバラバラになった鉱石をトロッコで運び出していく。それから選鉱。これは女性の仕事だった。鉱石と石をわけていく。

発破できるのは試験に合格した火薬係のみだった。マイトを使うのはお昼頃。導火線に火を付けみんな避難。外に出たころに中で爆破。坑内は埃が舞い上がっている。そとでお昼を食べてからまた入る。そうすれば埃もおさまっている。発破の使用はうるさかった。何本使い、何本残っているかきちんと記録されていた。こうした火薬を保管する火薬庫があり、それはコンクリートで作られていた。

山によってダイナマイトの仕掛けかたは違う。積さんの記憶では、着火して三分で爆発していた。その時の導火線の長さはおよそ１メートル。(時間のない時は)坑道の曲がりくねっている所の壁に隠れ爆発を待ち、爆風をやり過ごしてからトロッコで鉱石を運び出す。

死亡事故はなかったが、土砂に埋もれる事故はあった。削岩夫で長生きする人は余りいなかった。

―削岩夫やらは死ぬばかり。坑内に入った人はたいがい死んでしもうとろう。たばこ、坑内でのむ人はおらん。機械で粉がもうもう。水を使えば埃は収まる。けど早うほろうと思って水は使わん。

坑夫の多くは肺の病気（けい肺）で命をおとしている。本来、防塵のために水をかけながら作業が行われるが、あまり使われなかった。鉱石の採掘に夢中で粉塵をあまり気にしなかった。そのころからマスクを付けるようにと言われてはいた。当時は一般には一日４０銭もらっていたが、請け負いの人達はメートルいくらで契約していた。歩合制だったから掘れば多くお金がもらえたのである。金山で働くとケイハイが怖いが、実際にはお金がたくさんはいって来るので、やめられない人が多かった。

硫化鉄のある所に金もある。金は安山岩に含まれている。金と銀は一緒の鉱脈に含まれている。

奥さんは事務の仕事をしていた。

奥さんは昭和１２年に日曹工業に入社。八女女学校をでてから、勤められたという。貸借対照表など経理の仕事を主になさっていた。奥さんの旧姓は梶原で、久留米有馬藩の士族の出身であった。父？or祖父？が棚田に関する書類を収集していたが、現在は不明。お二人は昭和１７年に結婚され、福岡の方へと移られた。

本社採用が社員、社員は月給、星野採用の人は雇員、雇員は日給。用員、作業員もいた。―女学校ちいとばかし出てからちょっとは日給、あとは月給になった。金山での給料は最も良い人で一ヶ月１２０～１３０円。

しかしこれは課長さんなどの限られた人達のみの給料。実際に坑道に入って働く人達は、請け負いの人でも一日１円７０銭。選鉱婦は一日４０銭程度だった。ちなみに奥さんは最後のころには月に４８円の給料。給料日は二十日。こうした高給の課長さんたちも順繰りと招集されていってしまった。しかし戦後になると金山で働いていたころの事が懐かしく思われるようで、星野村を訪れる人が少なくなかったという。

女の人は坑内には入る事はなかったが、特別な理由はない。

ひざまでの腰巻きをはめて絣の着物をすっぽり。その格好をして選鉱。もんぺもはかな、ようあんなかっこうしてと、嫌う女の人もいた。

奥さんのように事務所で働く人は、下駄を履き着物を着て働いていた。

農業をしながら金山の仕事にも行っていた。また出稼ぎの人も多かったようで、朝鮮から

も少しだが来ていた。職種はいろいろだったが、特に木材だしが多かったそうである。

選鉱された鉱石はジャンジャンくだし、じょう山から精錬までおろして、かき場前へ。インクラインは下から精練所へ上げる。木浦・くまど間がインクライン。ジャンジャンくだしは索道といった。ワイヤーをはり、そのワイヤーに通された籠に鉱石をいれ運んでいく。

精練所は大会社が三つあった。日曹の精練所は木浦（キウラ）にあった。青金（金・銀を含んだ鉱石、合金を青金という）を精錬した。青金から純金へと精練。200トンの精錬が可能であったが、追いつかない。金山の最後のころには三つあった精練所も全て一緒になってしまったようだった。星野で処理できない分、堀った鉱石はトウマイ袋に入れて佐賀関へと送っていた。そこで精練をしてもらう。そこで金の延べ棒になって、こちらに帰ってきた。

精練の過程で出る排水は川に流されていた。そのため川の魚が全滅してしまった。精練の過程で青酸カリを使用していたからだ。田でもそうした水を用水として引いていたから大変だった。金を取り出すには水銀に金を含ませ、それをゆり鉢を用いて回収していた。

会社勤めで鉱山にはいる前は、自家製（自営）で金山を掘ったこともある。会社以前は自家用、個人個人で鑿、ハンマー、金槌。

わたしのおじいさん、石垣つきさん、石垣ついてさるきよらす（回っていた）。滝の脇の石垣にじいちゃんたちの名前が克明に書いてあった。

取ってきた鉱石は自分の家の水車でトントンとつき、細かくしていた。それを今度はゆり鉢で採鉱する。ゆり鉢の中に細かくなった鉱石と水銀を入れておく。それらを水の中でゆり鉢で回してやると、水銀が金と銀を含み採鉱できる。その昔は臼で鉱石を擂っていた。キンバスリと呼ばれる臼で大変重いものだった。

臼はクロタクという鉱山用の臼が一番堅い。

金はする臼があったよ。三坂にようけある。もみすり、ソバはひき臼がちがう。ソバは一人で回す。

自然金が見えるのをイシカネという。百貫の金はきれいといわれている。ここで金の結晶を見られたとの事だった。短冊形のものや雪の結晶のようなものまで形はさまざまだった。徳川時代に掘ったあとで見られたとの事だった。取れた金は鉱主さんが何匁いくら、というようにして買っていく。そのため小さな金を量るためのはかりがあった。その当時金を掘れば何とか生活はできるという程度。「金山で金持ちになった人はだぁれもおらん。」もうけても女あそび、大金を手にするような人はなく「金山とニワトリはもうけん」といわれていた。ニワトリは病気で死ぬ、卵は安い。

閉山後は憲兵として働いていたが、戦後に公職追放にあってしまった。憲兵は全員追放され、特高警察は四年以上勤務していたものは全て追放の対象とされた。その後、材木屋で働いた。また、同時に隣の子供の面倒を見たり、棚田で手伝いとして働いた。棚田での手伝いの日当は米一升（30銭）であった。

金山の隆盛時は星野村外から労働者がやってきて、星野村の人口は9000人を超えた。また、農業をしながら鉱山に勤める人もいた。山を持つ人は木材で生計を立てるから、鉱山に働きに行くことはなかった。

金山労働者内で採掘時に歌われた歌は特に無いが、茶もみのときの歌は「茶山歌」として存在する。茶摘みには日田や吉井から３人程度人を雇っていた。夜、寝ていると、「おばさんおばさん、わたしの横にだれかおる」夜ばいにくるものがいて、騒ぎになった。

百貫はイコール小室。オヤブ、セドノヒラ（瀬渡ノ平）、ソボラ。オヤブはだいぶ、だんだんがあった。狭ぁか、たんぼ。

山ん神は会社ではまつらん。参るもんは、おらんかった。金山神社、樋下（ヒサゲ）が

管理、この村の人達によってまつられていた。今は氷室さん一軒、金山は十六日が休みであった。十六日の休みはヤマンカミ祭り、十月十六日は山ン神の奉納相撲、青年やら、子どもやら、上手な人は五人抜き。

（渡邊太祐）

## 4.3.15 金山2

（その２）白坂弘さん（大正１１年生）より

星野村村議の白坂さんに鉱山跡とセラミック鉱山の案内をしていただいた。

まず初めに本星野の金鉱跡に行った。そこで、金の鉱石原石を見せてもらった。その後、鉱道内を歩いた。鉱内は真っ暗で明かりがないと何も見えない状態だった。当時はカンテラを持って採掘を行っていたそうだ。暗闇といつ天井が崩れてくるかわからないといった状況に恐怖心を覚え、同時に、金山での仕事が命がけであったということを実感させられた。訪れた金山から湧き出す水は硝酸塩を含んでいるため、飲み水には適さない。

次に訪れたのは山肌にセラミックを含んだ鉱石が散乱している場所であった。セラミックを含んだ鉱石は真っ白であった。京セラや東芝といった大企業が星野村のセラミックに注目しており、もしセラミックの含有量が多い鉱山が見つかれば、星野村にこれらの大企業を誘致できる。(故)笹川良一氏がこの話に乗りかけたことがあったが、村長が結婚式出席で、笹川氏指定の時間にいけなかった。白坂さんはそれがとても心残りらしい。

百　　貫：露天掘りの跡。採掘の情景はお茶の文化館にある金山絵巻にみることができる。

（その３）江藤一二三さん（明治４２生）より

江藤さんは、城山（じょうやま）の金山で監督として働いていた。

昔は山に大門口（おおもんぐち）と呼ばれる関所のようなものが設けられていた。そこには役人がつめていて、鉱山関係者以外が立ち入る事ができないように警備していた。ジョウヤマのちょっと西にあった。よく金が産出されていたころには、鉱山で働く人の履いている草鞋についた土を、水で洗い流して帰っていかなければならなかった。見張り所の横にサンプルマップがおいてあった。一メートルおきに調べたものだった。

城山の坑道には殿様鉱、中間鉱があった。立ていれというのは探るための坑道。殿様鉱が一番上の坑道。それから殿様鉱の裏側に一本。さらにその下100メートルのところに中間坑があった。それから立ていれ、鉱脈にぶつかるまで掘った横穴で、ツウ道の立ていれと、二つあった。ツウ道の200メートル下にトノサマ坑。坑道には一つの鉱脈につき、一つの鉄道が敷かれていた。坑道は水平に掘ってある。しかし鉱脈は斜めに入っている。一つの鉱脈は東西であっても傾いている。傾きの方向によって、傾きが南から北の方向へかけ上がっている場合を南枕、その反対の場合を北落しと呼んだ。七〇度から六八度、南落としはあ